

鴻 臚 館 跡 9

— 平成9年度発掘調査概要報告 —

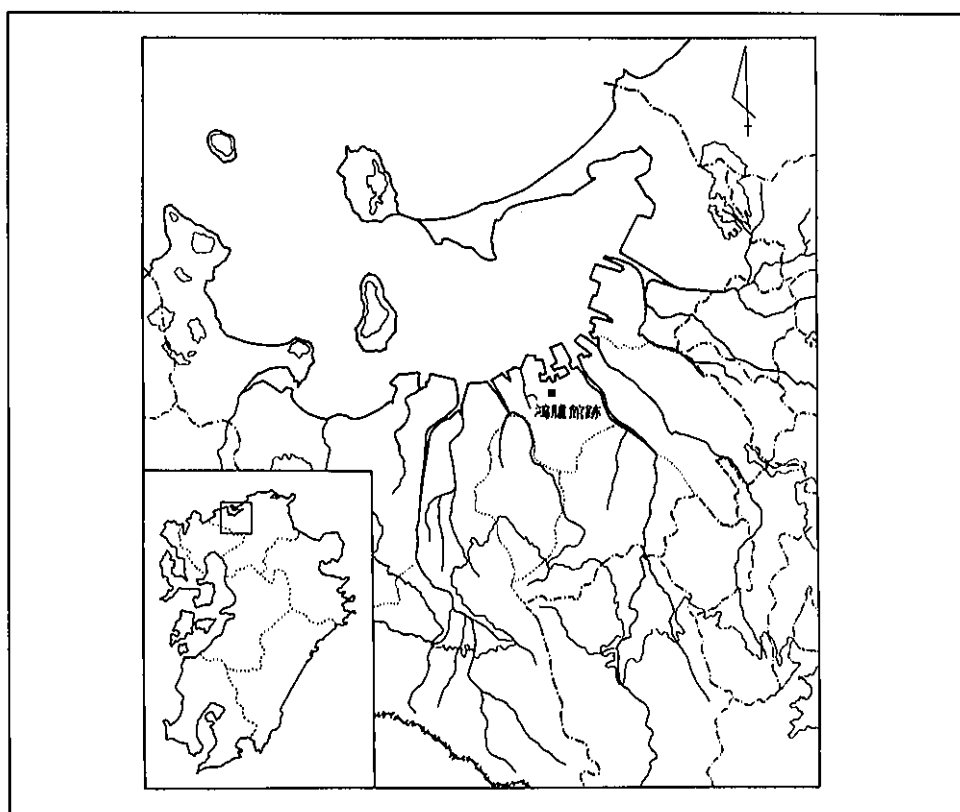
福岡市埋蔵文化財調査報告書第586集

1998

福岡市教育委員会

鴻臚館跡 9

平成9年度発掘調査概要報告



9736(FUE-39)

平成10年

福岡市教育委員会



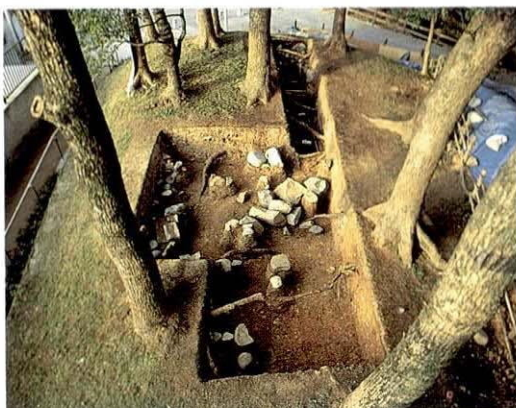
(1) 鴻臚館跡周辺景観（南から）



(2) 鴻臚館跡整備地全景（北東から）



(1) 第1区全景（西から）



(2) 第2区全景（南から）



(3) 第3区全景（南から）

序

鴻臚館跡の発掘調査は、昭和62年末、福岡市中央区の国史跡福岡城跡内にある平和台野球場外野席スタンド改修工事の際の発見を契機として、翌63年から本格的に開始されました。

本市では、鴻臚館跡の全容解明を目的として、昭和63年度に鴻臚館跡調査研究指導委員会を設置し、その御指導の下で、発掘調査と関連資料の収集等を現在推進しております。

本書は、平成9年度に実施した鴻臚館跡南域の遺構確認を目的とする発掘調査の概要報告書です。本報告書が埋蔵文化財への御理解と御認識の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から本報告書の完成にいたるまで、深いご理解とご協力をいただいた大蔵省福岡財務支局、福岡市都市整備局、また、温かくご指導いただいた鴻臚館跡調査研究指導委員会の各先生方、文化庁、福岡県教育委員会の皆様方には深甚なる謝意を表します。

平成10年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 町 田 英 俊

例 言

- 1 本書は、平成9年度に実施した鴻臚館跡発掘調査概要報告書である。
- 2、本書で用いた地図は、Fig.1に国土地理院発行五万分の1地形図(NI-52-10-11/福岡11号)福岡を、Fig.2に福岡市都市計画図、NO 60・61・71・72を使用した。
- 3、本書で用いた方位は、平面直角座標系第Ⅱ座標系方位である。磁北方位は西偏6°40′である。
- 4、遺構は通し番号をつけた後、遺構性格を表記したアルファベットを番号の前に付した。
柵列・堀；SA〇〇、井戸；SE〇〇、道；SF〇〇
建物跡；SB〇〇、堀・池；SG〇〇、柱穴；SP〇〇
溝状遺構；SD〇〇、性格不明の土壌・竖穴；SK〇〇またはSX〇〇
- 5、本書の執筆・編集は田中壽夫が担当した。
- 6、編集に際しては、整理調査員 宮園登美枝・黄建秋(図面整理・浄書)、
整理作業員 寺村チカ子、山口玲子、堀一恵、金石邦子(遺物分類整理)
の補助を受けた。

本文目次

第1章 序 説	1
1、調査計画	1
2、既往の調査	3
3、平成9年度調査事業概要	6
第2章 調査の記録	7
1、調査概要	7
2、第1区の調査	8
3、第2区の調査	18
4、第3区の調査	21
第3章 結 語	26
1、平成9年度調査のまとめ	26
2、B群遺構の平面構成	27

挿 図 目 次

	頁
Fig,1 鴻臚館跡と周辺遺跡分布図 (1/50000)	2
Fig,2 福岡城跡内発掘調査位置図 (1/5000)	4
Fig,3 指導委員会現地視察 (第1区)	6
Fig,4 平和台野球場内ボーリング調査 (北から)	6
Fig,5 平成9年度調査区位置図 (1/3000)	7
Fig,6 第1・2区配置図 (1/300)	8
Fig,7 平成9年度発掘調査区位置図 (1/500)	折り込み
Fig,8 第1区遺構平面図 (1/80)	9
Fig,9 第1区土層断面図 (1/80)	10
Fig,10 第1区出土遺物実測図1 (1/3)	13
Fig,11 第1区出土遺物実測図2 (1/3・1/4)	15
Fig,12 第1区出土遺物実測図3 (1/3・1/4)	17
Fig,13 第2区遺構平面および土層断面図 (1/80)	19
Fig,14 第2区出土遺物実測図 (1/3・1/4)	20
Fig,15 第3区配置図 (1/200)	23
Fig,16 第3区遺構平面および土層断面図 (1/100)	24
Fig,17 第3区出土遺物実測図 (1/3・1/4)	25
Fig,18 福岡城跡南側土塁部分遺構関連図	27
Fig,19 B群遺構平面略図	27

図 版 目 次

巻頭図版 1	(1) 鴻臚館跡周辺景観 (南から)
	(2) 鴻臚館跡整備地全景 (北東から)
巻頭図版 2	(1) 第 1 区全景 (西から)
	(2) 第 2 区全景 (南から)
	(3) 第 3 区全景 (南から)
PL, 1	(1) 第 1 区調査前現況 (南から)
	(2) 第 1 区調査終了後全景 (南から)
	(3) 第 1 区調査終了後全景 (西から)
PL, 2	(1) 第 1 区SD901検出状況 (東から)
	(2) 第 1 区SX904およびSD901検出状況 (南から)
	(3) 第 1 区SD901検出状況 (南西から)
	(4) 第 1 区SX904検出状況 (南から)
	(5) 第 1 区SX904土層断面 (南西から)
PL, 3	(1) 第 2 区調査前現況 (南から)
	(2) 第 2 区調査終了後全景 (南から)
	(3) 第 2 区北側トレンチ掘削状況 (北から)
	(4) 第 2 区作業風景 (南から)
PL, 4	(1) 第 3 区調査前現況 (北西から)
	(2) 第 3 区調査終了後全景 (南から)
	(3) 第 3 区掘り下げ状況 (南東から)
	(4) 第 3 区北側奥壁土層断面 (南から)
	(5) 第 3 区南側赤褐色粘質土上面SX908検出状況 (南から)
PL, 5	(1) 第 3 区西壁、SX908土層堆積状況 (南東から)
	(2) 第 3 区SX908検出状況 (東から)
	(3) 第 3 区SX908内作業風景 (南から)
PL, 6	第 1 区出土遺物 1 (1/3)
PL, 7	第 1 区出土遺物 2 (1/3)
PL, 8	第 1・2 区出土遺物 (1/3)
PL, 9	第 2・3 区出土遺物 (1/3)
PL, 10	第 1～3 区出土遺物 (1/3)

表 目 次

Tab, 1	鴻臚館跡調査中期計画表	1
Tab, 2	福岡城跡調査一覧	3
Tab, 3	第 1 区検出遺構一覧	11
Tab, 4	B群遺構 (東門・堀) 各部座標値および計測表	28

第1章 序 説

1. 調査計画

鴻臚館跡の発掘調査は、昭和62年末の平和台野球場外野席における関連遺構と遺物の発見を契機とする。昭和63年度には鴻臚館跡調査研究指導委員会が組織され、全容解明のための本格的な発掘調査が開始された。発掘調査は下表の「鴻臚館跡調査中期計画」の下で実施している。

中期計画は、鴻臚館跡推定地が国史跡福岡城跡内に立地しているために、文化庁をはじめとする関係各機関と協議の上、「舞鶴城址将来構想」の下で進められている城内各施設の移転事業計画を参考にしながら策定し、平成5年度第2回指導委員会です承を受けた。Tab.1にその概要を示した。

第Ⅰ期調査は平和台野球場外周南側部分を対象に、昭和63年度～平成4年度にかけて調査を実施。この地区では、奈良時代から平安時代までの建物遺構群と中国産陶磁器をはじめとする大量の遺物が出土し、鴻臚館跡の可能性が高いことが確認された。またこの地区は、5年度から7年度にかけて、平和台野球場撤去後の本格的整備までの当面の仮整備という位置づけで第Ⅰ期整備を実施した。

第Ⅱ期調査は、5年度と6年度に福岡城三の丸西郭にある「舞鶴公園西広場」を調査対象地として、福岡城跡西辺部における鴻臚館関連遺構と遺物の有無確認、および旧地形復元を目的に調査を実施した。その結果、福岡城西北域における築城当時の地業の状況と当時の海岸線の復元が可能となった。

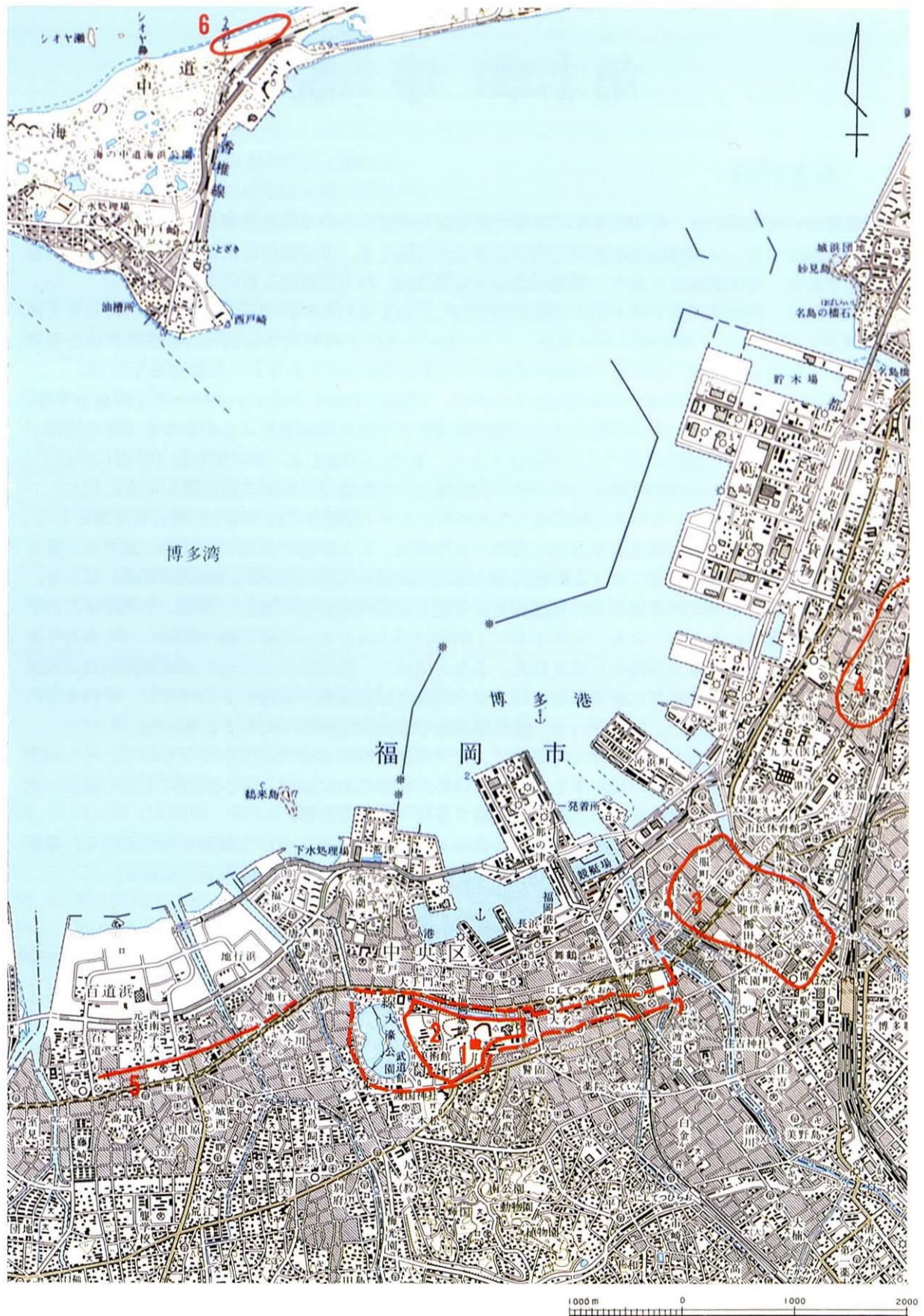
第Ⅲ期調査は、平和台野球場部分の発掘調査が可能となる時期までの調査である。9年度はこの第Ⅲ期調査の3年次にあたる。なお、9年4月に、同年11月末日をもって野球場を閉鎖し、平成10年度中に解体撤去の方針が本市当局から示された。これを受けて、教育委員会では、鴻臚館跡調査研究指導委員会に諮り、平成10年度に解体工事に伴う立会調査と試掘調査を実施することとし、それまでの中期計画の一部を変更した。したがって、第Ⅲ期調査の計画期間は10年度までとなった。

第Ⅳ・Ⅴ期調査は平和台野球場部分の調査で、野球場撤去後に本格的調査を行うもので、その期間は、平成11年度～19年度までの10ヶ年を見込んでいる。またこれに並行して、調査終了後の整備に向けて、基本構想から実施設計までの立案・整備施工を行う予定である。

第Ⅵ期調査は、鴻臚館跡の全容解明にとって必要と思われる地点について調査を行うもので、第Ⅳ期調査以降の成果およびその進捗状況をみながら、調査地点等は検討して行く予定である。

Tab.1 鴻臚館跡調査中期計画表（平成9年12月15日現在） ※網かけ部分は本報告の対象とする事業年度

	対象地区	昭62～平4	平5～6年	7年	8年	9年	～15年	～20年	～25年	備 考
発 掘 調 査	緊急調査	—								鴻臚館の発見
	第Ⅰ期調査	旧テニスコート	—							指導委員会の設置 本格的調査の開始 第Ⅰ期整備対象地
	第Ⅱ期調査	西広場		—						範囲確認調査 旧地形の復元
	第Ⅲ期調査	野球場外周 南側土塁他			—	—				範囲確認調査 平成7年度から野球場の 調査が可能となる時期迄
	第Ⅳ期調査	野球場南区					—			球場撤去後に調査着手 (5カ年計画)
	第Ⅴ期調査	野球場北区						—		球場撤去後に調査着手 (5カ年計画)
	第Ⅵ期調査	高等裁判所 等重要地点							—	
整 備	第Ⅰ期整備	旧テニスコート		—						平成7年8月10日完成
	第Ⅱ期整備	球場跡地						—	—	平成23年頃に完了予定 (10カ年計画)



- | | |
|-----------------|------------------|
| 1. 鴻臚館跡 | 4. 箱崎遺跡群 |
| 2. 福岡城跡 (国指定史跡) | 5. 元寇防塁跡 (国指定史跡) |
| 3. 博多遺跡群 | 6. 海の中道遺跡 |

Fig.1 鴻臚館跡と周辺遺跡分布図 (1/50000)

2. 既往の調査

福岡城跡の調査は、史跡指定範囲の内外において、平成9年度末までに42次にわたる調査が実施されている。そのうち鴻臚館跡発掘調査事業として実施されたのは14次20地点である。Tab. 2にその内訳を示した。なお文献番号は参考文献一覧に対応する。なお、本年度の調査は福岡城跡関係第39次調査にあたり、鴻臚館跡関連調査では第14次調査となる。

Tab. 2 福岡城跡調査一覧（平成9年度現在）

調査番号	次数	地 区	史跡内外区分	調査原因	調査面積	調査期間	調査担当者	文 献	備 考
—	A	三の丸中央部	史跡内	テニスコート建設		510800～3日間	九州文化総合研究所	1・7・11	鴻臚館1次
—	B		史跡内	国立病院建設		590626～590702	文部省文化財保護委員会	1	
6301	1	三の丸東郭	史跡内	裁判所建設	596	631007～631105 640327～640331	福岡県教育委員会	2	鴻臚館2次
7605	2	内堀内壁	史跡外	地下鉄建設	14,900	761201～771008	折尾学, 池崎譲二 浜石哲也, 山崎龍雄	4	
7728	3	薬院新川	史跡外	地下鉄建設	500	780301～780630	折尾学, 池崎譲二	4	
7948	4	御鷹屋敷跡	史跡内	史跡整備	2,200	790719～790811	飛高憲雄, 力武卓治	3・8	
8134	5	赤坂門北側内堀	史跡外	ビル建設	70	820317～820326	田中壽夫	4	
8343	6	祈念櫓跡	史跡内	史跡整備	36	840201～840612	井沢洋一		
8449	7	肥前堀東端部	史跡外	県公園建設	580	840601～840612	福岡県教育委員会		
8533	8	肥前堀東部	史跡外	市庁舎建設	150	850700～850800	折尾学, 山崎純男	9	
8747	9	三の丸中央部	史跡内	野球場改修	650	871225～880120	山崎純男, 吉武学	11・14	鴻臚館3次
8829	10	三の丸中央部	史跡内	確認調査	856	880727～881210	山崎純男, 吉武学	11・22	鴻臚館4次
8865	11	西～南縁土塁	史跡内	公園整備	500	880727～881210	山崎純男, 吉武学	10	
8840	12	肥前堀東部	史跡外	ビル建設	650	881107～881126	柳沢一男	12	
8910	13	三の丸中央部	史跡内	確認調査	1,200	890420～891207	山崎純男, 吉武学	11・22	鴻臚館5次
8950	14	肥前堀東部	史跡外	市庁舎建設	700	891011～891021	菅波正人	13	
9005	15	三の丸中央部	史跡内	確認調査	1,300	900409～910131	山崎純男, 吉武学	11・22	鴻臚館6次
9065	16	月見櫓跡	史跡内	確認調査	190	910301～910331	山崎純男, 吉武学	15	
9130	17	三の丸中央部	史跡内	確認調査	1,000	910501～920331	山崎純男, 瀧本正志	16・22	鴻臚館7次
9146	18	時櫓跡	史跡内	確認調査	250	920301～920331	瀧本正志		
9218	19	三の丸中央部	史跡内	確認調査	1,670	920615～921030	山崎純男, 瀧本正志	17	鴻臚館8次
9236	20	三の丸中央部	史跡内	確認調査	430	920910～930331	山崎純男, 瀧本正志	17・22	鴻臚館9次
9262	21	花見櫓跡	史跡内	確認調査	200	930301～930331	瀧本正志		
9326	22	三の丸西部郭	史跡内	確認調査	450	930816～940228	田中壽夫, 瀧本正志	19	鴻臚館10次
9345	23	追廻門南側堀	史跡外	公園整備	220.3	931213～940228	井沢洋一	18	
9353	24	本丸西縁部	史跡内	公園整備	80	931211～931221	田中壽夫, 瀧本正志		
9363	25	潮見櫓跡石垣	史跡内	史跡整備	65	940301～940328	田中壽夫, 瀧本正志		
9412	26	赤坂門石垣	史跡外	変電所建設	430	940525～940806	吉武学	20	
9420	27	三の丸中央部	史跡内	史跡整備	50	940606～940731	田中壽夫, 瀧本正志	21	鴻臚館11次
9432	28	三の丸西部郭	史跡内	確認調査	850	940801～950320	田中壽夫, 瀧本正志	21	鴻臚館11次
9451	29	三の丸東部郭	史跡内	施設建替	1024	941101～950130	力武卓治	25	
9463	30	三の丸南側土塁	史跡内	確認調査	60	950201～950217	田中壽夫, 瀧本正志	21	鴻臚館11次
9537	31	三の丸中央部	史跡内	確認調査	300	951101～960329	田中壽夫	24	鴻臚館12次
9546	32	中堀	史跡外	共同住宅建設	154	951211～960329	瀧本正志	23	
9561	33	三の丸西北郭土塁	史跡内	公園整備	500	960301～960329	力武卓治		
9617	34	三の丸西南郭土塁	史跡内	公園整備	32	960621～960702	田中壽夫		
9620	35	三ノ丸中央部	史跡内	確認調査	450	960704～961204	田中壽夫	24	鴻臚館13次
9630	36	肥前堀	史跡外	共同住宅建設	46	960823～960823	池田佑次		
9639	37	赤坂門外壁	史跡外	事務所建設	10	960912～960912	池田佑次		
9671	38	潮見櫓跡基壇	史跡内	史跡整備	300	970220～970318	田中壽夫		
9736	39	三ノ丸中央部	史跡内	確認調査	204	970818～980131	田中壽夫	26	鴻臚館14次
9751	40	追廻門南側内堀内壁	史跡内	公園整備	135	971027～971107	田中壽夫		

凡例・太字箇所は本報告掲載分

- ・史跡整備：教育委員会所管事業に伴う調査
- ・公園整備：都市整備局所管事業に伴う調査
- ・確認調査：福岡城跡・鴻臚館跡の調査
- ・工事名のある調査：開発に伴う緊急調査

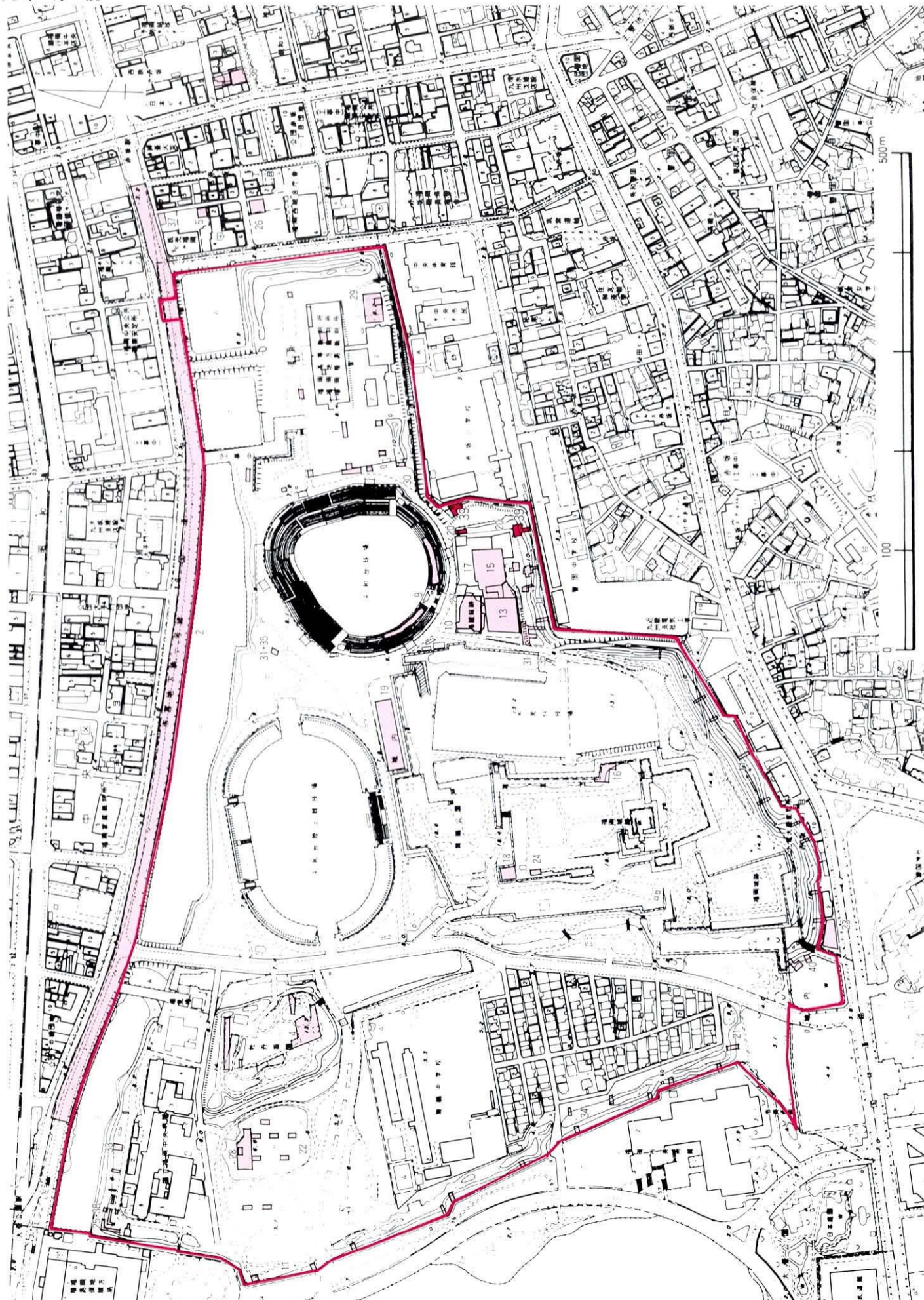


Fig. 2 福岡城跡内発掘調査位置図 (1/5000) (番号は福岡城跡内調査次数)

【調査報告書・文献一覧】

1	高野孤鹿	『平和台の考古史料』	1972
2	福岡県教育委員会	「史跡福岡城発掘調査概報」 福岡県文化財調査報告書第34集	1964
3	福岡市教育委員会	「筑前国福岡城三ノ丸御鷹屋敷」 福岡市埋文調報第59集	1980
4	福岡市教育委員会	「福岡城址―内堀外壁石積の調査―」 福岡市埋文調報第101集	1983
5	池崎護二・森本朝子	『福岡市立歴史資料館所蔵の高野コレクション』 福岡市埋文調報第101集所収	1983
6	弓場知紀	『出光美術館の高野コレクション』 福岡市埋文調報第101集所収	1983
7	九州大学考古学研究室	『九州大学考古学研究室所蔵の平和台出土遺物』 福岡市埋文調報第101集所収	1983
8	福岡市教育委員会	「筑前国福岡城三ノ丸御鷹屋敷図録編」 福岡市埋文調報第59集	1990
9	福岡市教育委員会	「福岡城肥前堀」 福岡市埋文調報第131集	1986
10	福岡市教育委員会	「福岡城跡・Ⅳ―内堀内壁の調査―」 福岡市埋文調報第237集	1991
11	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡Ⅰ 発掘調査概報」 福岡市埋文調報第270集	1991
12	福岡市教育委員会	「福岡城肥前堀第3次調査報告」 福岡市埋文調報第293集	1992
13	福岡市教育委員会	「福岡城肥前堀第4次調査報告」 福岡市埋文調報第294集	1992
14	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡Ⅱ」 福岡市埋文調報第315集	1992
15	福岡市教育委員会	「福岡城 月見櫓」 福岡市埋文調報第316集	1992
16	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡Ⅲ」 福岡市埋文調報第355集	1993
17	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡4 平成4年度発掘調査概要報告」 福岡市埋文調報第372集	1994
18	福岡市教育委員会	「福岡城跡第23次調査報告」 福岡市埋文調報第415集	1995
19	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡5 平成5年度発掘調査概報」 福岡市埋文調報第416集	1995
20	福岡市教育委員会	「福岡城赤坂門跡―福岡城跡26次調査報告―」 福岡市埋文調報第463集	1996
21	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡6 平成6年度発掘調査概要報告」 福岡市埋文調報第486集	1996
22	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡7―鴻臚館跡第Ⅰ期整備報告―」 福岡市埋文調報第487集	1996
23	福岡市教育委員会	「福岡城跡―福岡城中堀跡の調査―」 福岡市埋文調報第498集	1997
24	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡8―平成7・8年度発掘調査概要報告―」 福岡市埋文調報第545集	1997
25	福岡市教育委員会	「史跡福岡城跡―東の丸の調査―」 福岡市埋文調報第546集	1997
26	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡9 平成9年度発掘調査概要報告」 福岡市埋文調報第586集	1998

(福岡市埋文調報は、福岡市埋蔵文化財調査報告書の略)

3. 平成9年度調査事業概要

(1) 発掘調査の組織

1) 調査および整備指導

鴻臚館跡調査研究指導委員会（第5期2年次）

委員長	九州大学名誉教授	横山浩一	考古学			
副委員長	学習院大学教授	笹山晴生	国史学			
委員	財団法人大阪府文化財調査研究センター理事長	坪井清足	考古学			
	奈良国立文化財研究所長	田中 琢	考古学			
	福岡大学教授	小田富士雄	考古学	九州大学教授	西谷 正	考古学
	山口大学名誉教授	八木 充	国史学	福岡大学教授	川添昭二	国史学
	岡山大学教授	狩野 久	国史学	東京大学教授	佐藤 信	国史学
	前奈良国立文化財研究所長	鈴木嘉吉	建築史学	瑞穂短期大学教授	澤村 仁	建築史学
	九州芸術工科大学教授	杉本正美	造園学	工学院大学教授	渡辺定夫	都市工学
	京都大学名誉教授	中村 一	造園学			

2) 発掘調査・整備事業主体

調査主体	福岡市教育委員会教育長	町田英俊
	文化財部長	平塚克則
調査総括	文化財整備課長	柳田純孝
	文化財部課長（史跡整備等担当）	塩屋勝利
庶務担当	管理係長	陶山能成
	管理係	林 国広
調査・整備担当	文化財整備課主査	田中壽夫
整理調査員		黄 建秋
		宮園登美枝
調査作業	家村富基郎、磯村博男、梅崎 元、大橋善平、大村芳雄、嘉藤栄志、 斎藤善弘、島津明男、高田甚一郎、堤 篤史、中尾 亨、仲野正徳	
整理作業	寺村チカ子、堀 一恵、金石邦子、山口玲子	

(2) 調査事業の概要

1) 鴻臚館跡調査研究指導委員会 平成9年12月3日と4日に実施。平成9年度調査中間報告とその検討、および平和台野球場解体工事に伴う調査、11年度以降の長期調査計画の検討を行った。

2) 鴻臚館跡発掘調査 平和台野球場南東部の鴻臚館跡関連遺構の有無確認と範囲確認を目的として、3地点について調査を実施した。調査期間は平成9年8月18日～10年1月末日迄である。

3) ボーリング地質調査 平和台野球場グラウンドおよびその周辺における旧地形復元を目的として6地点について、平成10年1月31日～2月6日に実施。平和台野球場跡と高等裁判所間に浅い谷が深く湾入していることが再確認できた。

4) 公開事業 鴻臚館跡展示館「博物館情報」コーナーに、福岡市およびその周辺の博物館・資料館紹介のためのパネルを製作展示した。

また、展示説明会も兼ねて、演奏会「ギターによる鴻臚館幻想」を平成9年5月23日に実施。92人参加。



Fig. 3 指導委員会現地視察（第1区）



Fig. 4 平和台野球場内ボーリング調査（北から）

第2章 調査の記録

1. 調査概要

(1) 調査の目的

本年度の調査は、平成7年度から実施している鴻臚館跡第Ⅲ期調査の3年次にあたる。調査は、平和台野球場外周南側に位置する福岡城跡土塁下部における、鴻臚館跡関連遺構の有無および範囲確認を目的として実施した。

(2) 調査区の設定

調査区は3地点設定し、設定順に北から第1区～第3区と呼称した。第1区・第2区は奈良時代の東門(SB300)前面における遺構の有無確認のために東門の東西中軸線の東側延長上に設定した(Fig.6)。第3区は、平成2～3年度の調査によって確認された推定南門基壇の南北中軸線を基準として、平安時代の礎石建物SB31を東側へ対称に折り返した地点の南側延長上に設定した(Fig.7)。

(3) 調査結果の概要

第1区では、江戸時代の土塁状の高まり(SX904)、明治期以降の石組溝または暗渠(SD901)、それを一部壊して掘削された戦前または戦後の箱掘り状の竖坑(SX902)や廃棄用土壌等を確認した。第2区では、福岡城跡土塁盛土が少なくとも4m以上堆積していることが確認された。調査面積が狭いこともあり、平安期の遺構面には達することができなかった。第3区では、約4.5m以上の厚さの福岡城跡土塁盛土下部で、奈良時代に造成された赤褐色粘質土層を確認した。奈良～平安期の遺構は福岡城築城時またはそれ以前に削平されており、確認できなかった。遺物は各区とも、土塁盛土から古代瓦破片が大量に出土しているほか、須恵器、唐末・北宋期および南宋期の白磁、青磁、元～明代の青磁近世および近現代の備前焼・瀬戸焼や肥前系陶磁器等が出土した。

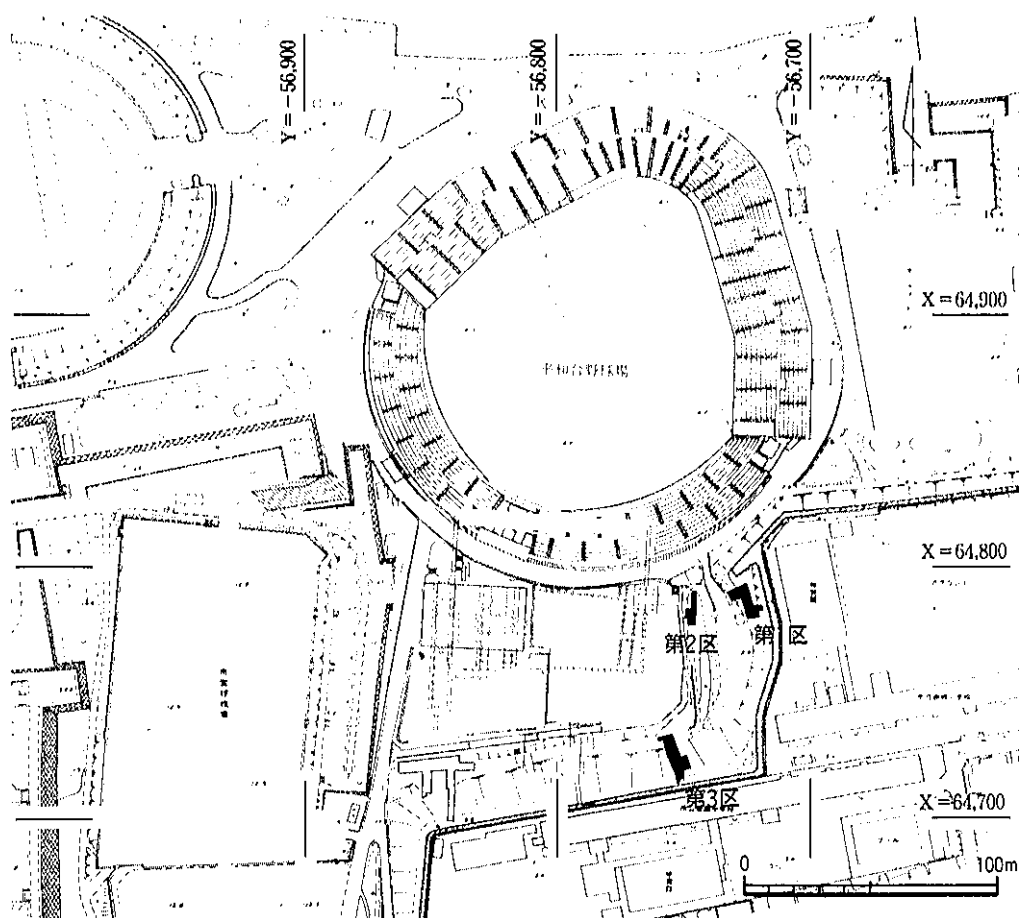


Fig.5 平成9年度調査区位置図 (1/3000)

2. 第1区の調査

(1) 調査区の位置 (Fig. 5～7, PL, 1)

当該区は、平成3年～4年度にかけて確認された奈良時代の門跡 (SB300) の南北中軸線から東側へ約38～42mの地点に位置している。この地点は、福岡城跡土塁の外壁斜面上に位置しており、現況地表面の標高は4.3m、遺構検出面は3.3m前後を測る。SB300の検出面は標高8.7～8.3mであるので、検出面の相互の比高差は約5mある。なお調査面積は71㎡である。

(2) 土層堆積状況 (Fig. 9, PL, 1・2)

当該区の土層は、大きく8層に分けられる。第1層 (黒灰色腐植土)・1-2層 (黄褐色～褐色粘質土) は現代の表土および盛土であり、平和台野球場建築の際の周辺整備に伴い造成されたものと、それ以降の再整備等によるものである。第2層 (黒色腐植土) は明治期以降から戦前の地表土である。第3層 (褐色粘質土) は、調査区を南北に縦断して掘削された (SX902) を覆っている整地層である。石組遺構SD901はこの層の下位の第5層上面で検出された。SX902は明治期～昭和前期に掘削されたと考えられることから、第3層の整地時期はそれ以降戦後までのものと考えられる。第4層はSX902の埋土で白色～黄白色風化頁岩小片を多く含む赤褐色粘質土である。第5層はSX904を覆う整地層で、黄白色～白色風化頁岩を多く含む黄褐色～褐色粘質土である (SX903)。第6層 (暗灰色～黒灰色砂質土) は、

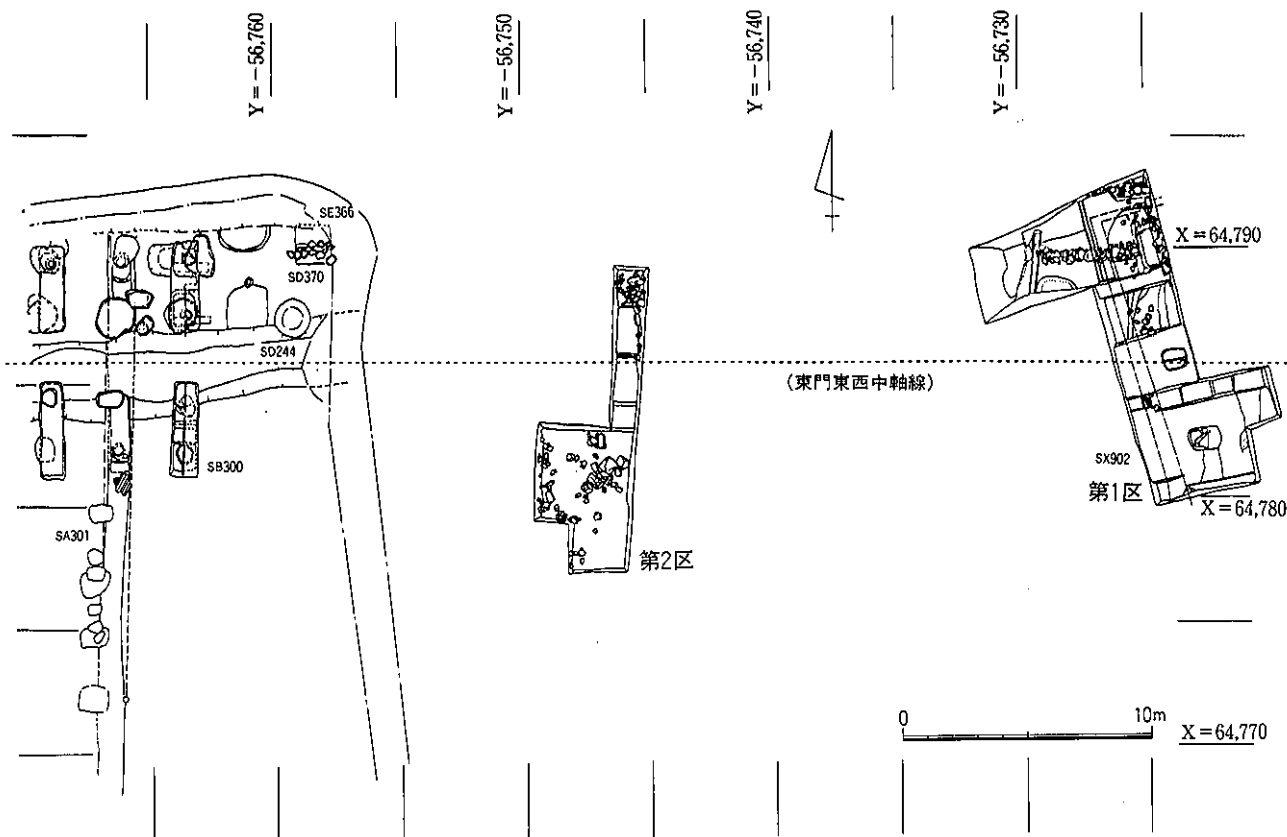
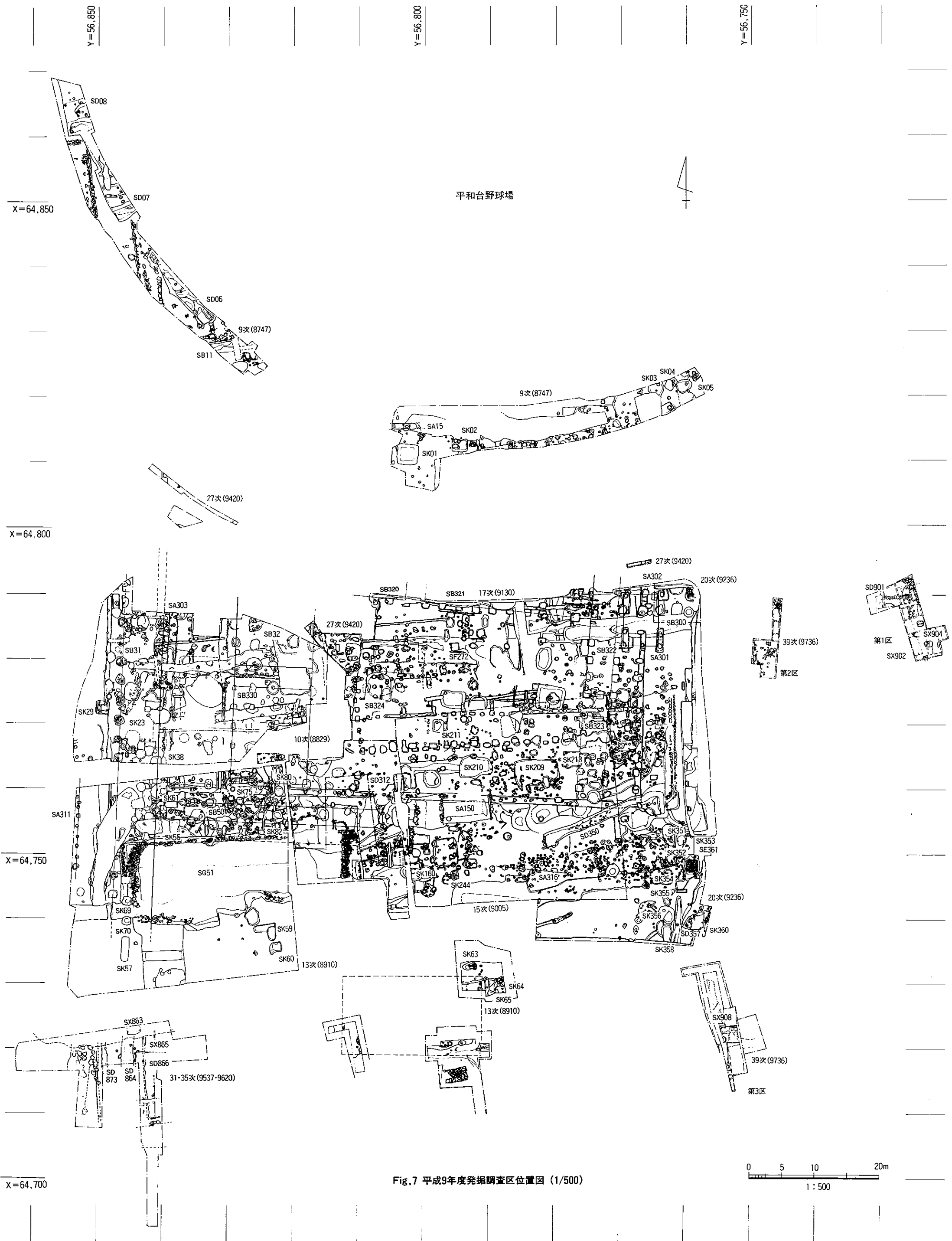


Fig. 6 第1・2区配置図(1/300)



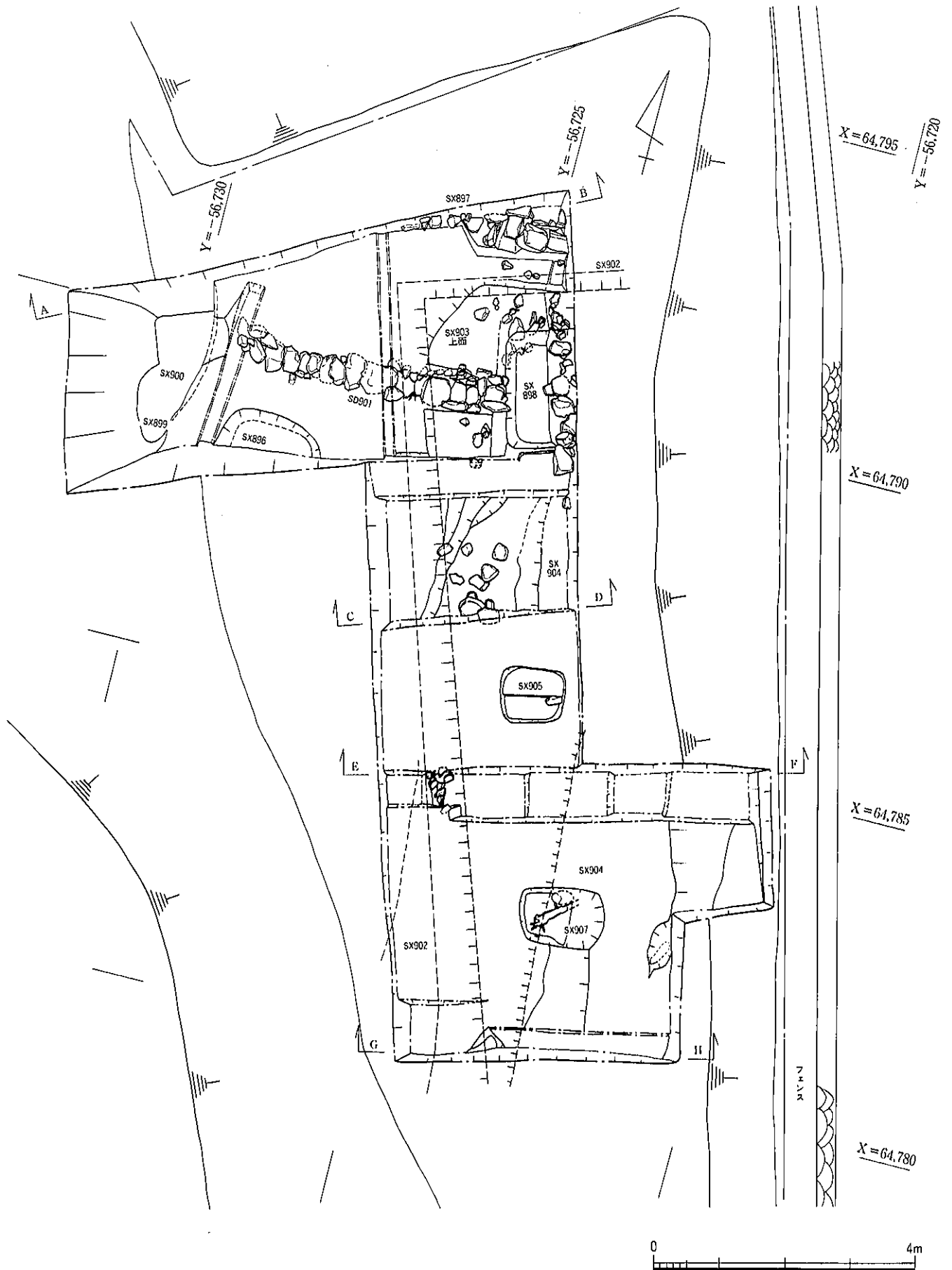


Fig. 8 第1区遺構平面図 (1/80) (A~Hは断面線)

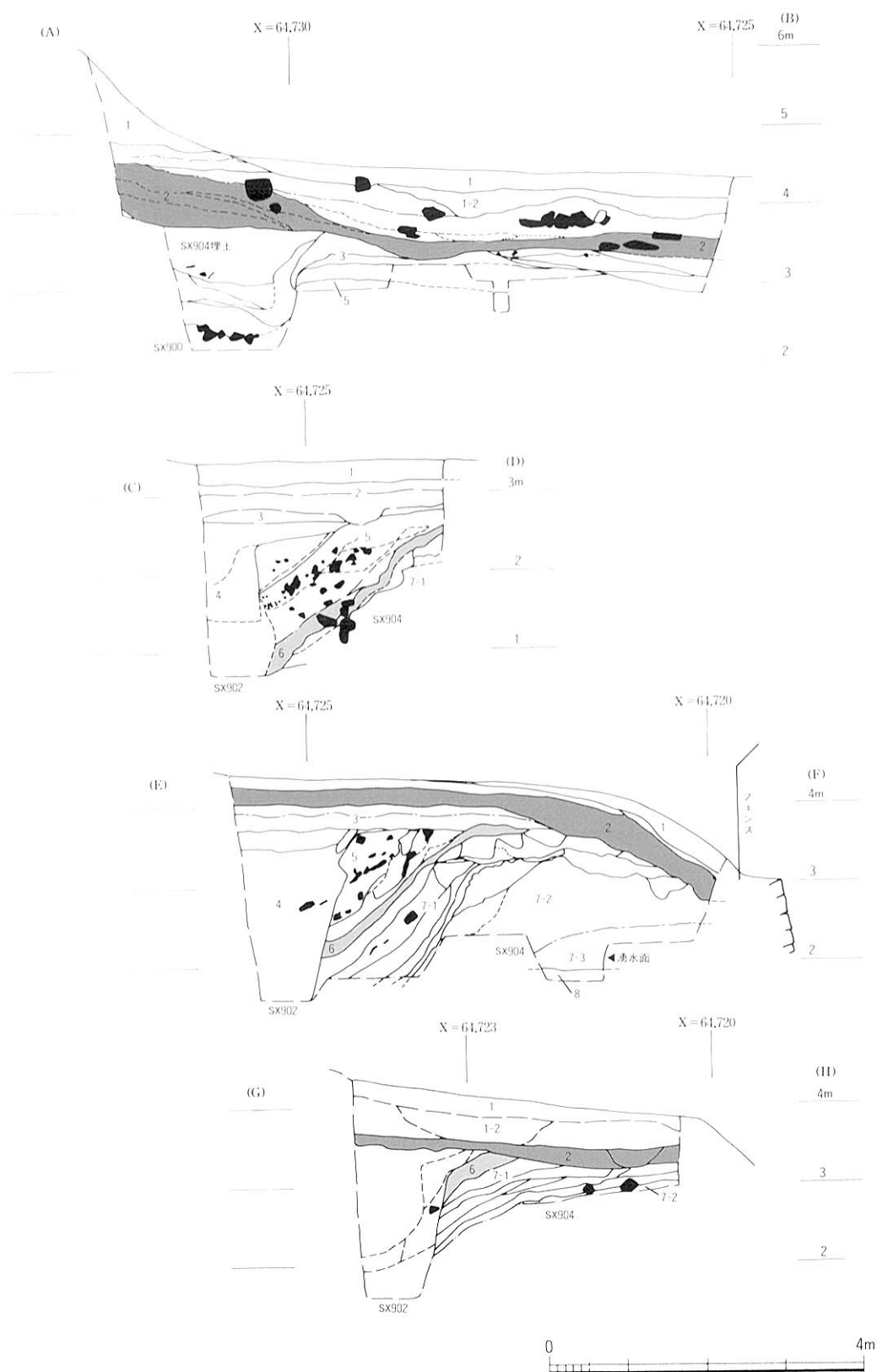


Fig. 9 第1区土層断面図 (1/80)

土塁状の高まりのSX904上面を覆う土層で、江戸時代～幕末・明治期にわたる表土層と考えられる。第7層はSX904を構築する盛土層で褐色の風化頁岩腐植土を主とする。基底部に近い第7-3層はきめの細かな明褐色花崗岩風化土(真砂土)で、水平に盛っている。現在の湧水面は標高約2mで、真砂土下面に相当する。基底面と考えられるのは第8層で、風化頁岩碎片が主となる褐色粘質土である。その厚さは少なくとも50cm以上と思われる。

(3) 遺構と遺物の概要

検出した遺構と遺物の概要は下記ようになる。

Tab.3 第1区検出遺構一覧

遺構名と推定時期	出土遺物の概要
戦後の石垣・土壇 (SX897・898・899・900・905)	古代瓦破片・越州窯系青磁・白磁
昭和前期の竪坑(SX902)	肥前系染付・15世紀代龍泉窯系青磁 宋代白磁・唐末～北宋代白磁および越州窯系青磁
明治以降の土壇(SX896)	肥前系陶磁器(生活雑器・茶器仏前具など) 越州窯系青磁・古代瓦(鴻臚館式軒丸・縄目)片
明治期以降の石組溝または暗渠 (SD901)	古代瓦片
江戸～明治期以降の盛土層(SX903)	古代瓦片・奈良期須恵器片・新羅焼片・白磁
江戸期の土塁状遺構(SX904)	第6層および第7層から古代瓦片、越州窯系青磁片、 龍泉窯系青磁(鎌倉期)

(4) 遺構と遺物各説

以下の説明のうち遺構はすべて近世以降のものである。明らかに昭和前期～現代のものと判断された遺物については省略した。遺物はいずれも各土層および遺構から二次的な混入の状態出土した。

1) 第1層(表土層)出土遺物(Fig.10, PL.6)

第1層においては、調査区北側斜面で近世の遺物が投棄された状況で多数出土した。近世瓦破片と古代瓦片を主として、近世肥前系染付片、土師器皿、土人形、瓦質土器(火鉢・火舎など)、中世の陶磁器片のほか、古代の白磁や青磁、須恵器、新羅焼等が若干出土している。

土師器皿(1～4) 口径7.4～7.9cm、器高1.2～1.9cm、底径5.3～6.9cmを測る。いずれも焼成はあまく軟質でもろい。色調は明褐色で、胎土には雲母細片を多く含む。底部には右回転による糸切離痕が残る。4の口縁部は炭化物が付着している。江戸期のものである。

焼塩壺蓋(5) 口径7.6cm、器高1.7cm。焼成は比較的良好に焼きしまっている。外面はナデ仕上げで、内面には目の細かな布目圧痕が残っている。

土人形(6) 二つの米俵の上に立つ大黒像を象った人形である。高さ3.5cm、幅2.1cm、厚さ1.7cm。胎土はきめ細かな泥質土で、焼成はややあまく軟質である。側面には型の合わせ目が残る。

染付中皿(7) 口径13.9cm、器高3.7cm、高台径6.45cm。内面には熊笹・花文を大きくあしらひ、深い紺色の呉須で施文している。外面裏文様は折枝梅文または梅花連続文をめぐらしている。高台は蛇ノ目高台で露胎。

陶器鉄絵碗(8) 口径12.7cm、器高4.9cm、高台径4.5cm。回転ヘラケズリ体部下から高台は削り

だしている。体部下部と高台以外に釉薬を薄くかけている。釉色は黄白褐色で細かな氷裂が器面全体にみられる。内底見込には鉄釉でデフォルメした帆船を一気に描いている。

磁器製分銅(15) 高さ9.3cm、幅6.2cm、厚さ4.3cm、重さ420g。底部以外に透明釉が薄くかかる。正面には商号名岐阜 町と重さの表示が、また裏面には重さの調整を図るための孔の跡が残る。

陶器播鉢(16) 口縁端部はY字形に上方に開き、外面には弱い段を有する。降ろし目は8条から10条が一単位で、底部から口縁に向かって反時計回りに施されている。強く焼きしめる。

龍泉窯系青磁碗(11) 内面にヘラ片切彫による蓮華文を施している。胎土精良。焼成堅緻。釉色は薄い青緑色で、細かな氷裂が全体にみられる。

新羅焼長頸壺(9)・壺(10) 9は頸部径4.8cm。頸部中央に二条の沈線、頸部と体部の境に断面三角形の突帯がめぐり、型部には直径0.4cmほどの押圧竹管文を施している。10も外面に押圧竹管文を施す。いずれも焼成良好で強く焼きしめる。灰色を呈する。なお胎土断面の色調は暗赤紫色。

白磁碗(12・20) 12は口縁部破片で口径15.6cm。20は高台部破片で、高台高0.5cm、高台径5.9cm。いずれも小玉縁の口縁部を持つ白磁である。胎土は白色で精緻。釉薬はうすい乳白色がかかった透明釉で、釉上がりは良好である。20は蛇目高台で皿付部は施釉後、掻き取っている。

越州窯系青磁碗(13・14・17～19・21) いずれも底部破片である。胎土は精良で、焼成が堅緻で釉上がりは良好な精製品(13・21)と、鉄分の吹き出しが多く見られ、焼成温度が低いために、釉上がりは不良で釉色が黄緑灰色の粗製品(14・17～19・21)がある。輪高台のものと、やや上げ底気味の平高台のものがあるが、前者は精製品で後者は粗製品が多い。

2) 第2層出土遺物 (Fig.10・11, PL.6・7)

第2層では、調査区中央から北側、特にSX896周辺で多数の18～19世紀の肥前系陶磁器がまとまって出土した。

土師器皿(22～24) 口径7.1～7.8cm、器高1.1～1.4cm、底径5.4～6.4cm。いずれも焼成はあまく軟質でもろい。色調は褐色～明褐色で、胎土には雲母細片・石英砂を多く含む。右回転の糸切り離し。

土製ミニチュア壺(25) 器高1.6cm、体部径2.9cm、底径2.6cm。手捏によるもので、肩部からやや下がった位置に径0.8cmの孔が穿たれている。

土人形(26) 帝釈天を象ったと思われる。高さ4.2cm、幅3.0cm、厚さ1.8cm。胎土はきめ細かな泥質土で、焼成はややあまく軟質である。底部から頭部に向けて棒に刺すための穴が穿たれている。

染付仏飯具(29) 口径7.1cm、器高6.2cm、脚部底径4.0cm。口縁部外面には菊花文をあしらっている。呉須色は淡い藍色。底部は回転ヘラケズリ、露胎である。

青磁染付碗(31・38) 蓋31は碗38とセットとなるもので口径10.2cm、器高3.2cm。38は口径11.3cm、器高6.8cm、高台径4.6cm。いずれも外面に青みの強い釉薬をかけ、口縁部内面には草花の連続文を、内底には五弁花、高台内には「福」字銘が暗藍色の呉須で描かれている。

白磁皿(27) 口径4.9cm、器高2.6cm、底径4.1cm。型造りによるとと思われる。底部は露胎で全体に透明釉を薄くかけ、釉上がりは良好である。

染付盃(32) 口径7.9cm、器高3.8cm、高台径3.0cm。わずかに青みがかかる体部外面に、牡丹文を一對あしらっている。呉須は淡い青色。高台皿付には砂粒が付着している。

白磁輪花鉢(28) 口径17.3cm、器高6.2cm、高台径8.8cm。体部下半から高台部は回転ヘラケズリによる。口縁部は六輪花で、体部外面には押圧沈線を入れ花卉を象っている。内面には印花文を施文。文様は不鮮明である。文様は2種類で、交互に各々3面施文している。

染付小皿(35) 口径10.1cm、器高2.0cm、高台径6.4cm。内底には型紙摺りによる竹文が描かれている。高台は蛇ノ目高台で、露胎。

染付碗(30・33・34・37) 30・34は広東碗形の器形のもので、高台がやや高く、体部は高台から直線的に開く。30の内底には鷺文が、34には花文が描かれている。34は口径12.0cm、器高6.5cm、高台径7.4cm。33は腰が深く赤褐色の口紅を施した碗で、松文を体部外面に一對描いている。口径11.2cm、器高5.7cm、高台径5.0cm。瀬戸焼か。37は筒型の碗で、牡丹文を体部中央に大きく配している。口縁端部は露胎である。口径9.8cm、器高8.2cm、高台径7.0cm。

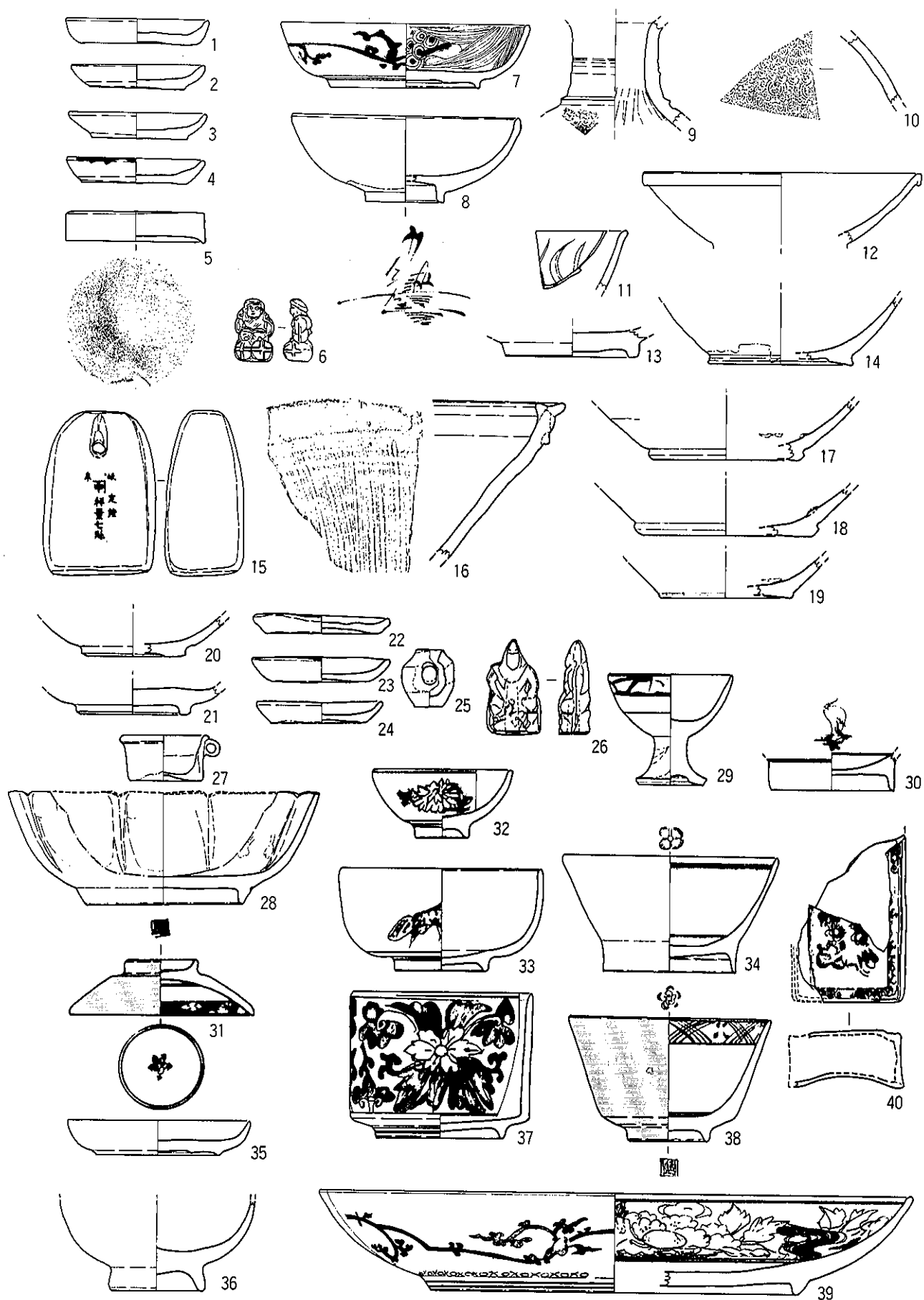


Fig.10 第1区出土遺物実測図1 (1/3)

染付大皿(39) 口径33.1cm、器高6.5cm、高台径33.1cm。内底に獅子文を、体部内面には牡丹文と流水文を大きく配し、外面裏文は梅花文を巡らす。高台内には銘が記されている。銘文は不明。いずれも深い暗藍色の呉須色である。

染付水滴(40) 現存長9.1cm、幅5.9cm、厚さ3.2cm。型起こしによるもので、内面にはやや目の粗い布目圧痕が残る。文様は松文を中央に配し、周縁に沿って青海波がくずれた渦文を連ね、ややくすんだ藍色釉を施釉。

青磁鉢(46) 口径11.3cm、器高6.8cm、高台径4.6cm。やや発色の悪い半透明の青緑色の釉薬が全体にかかる。内面にはヘラ描きによる草花文、外面には波状文を描く。強く外反する口縁上端部には弱い沈線が巡る。

陶器椀(36・42) 36は高台がやや高めで腰の深い椀である。高台径5.4cm。全面施釉後に高台畳付は掻き取っている。釉色は薄く黄白色がかり、細かな氷裂が入る。胎土は白色で良く焼きしまっている。42は口径8.4cm、器高5.5cm、高台径4.1cm。内外面ともに白釉を刷毛で施釉する。器壁は薄く焼成堅緻。胎土は灰褐色。

陶器水差(43) 体部がやや内傾する筒型の水差である。口径11.7cm、器高10.0cm、高台径7.4cm。褐色の釉薬を全面施釉後、白釉を刷毛で波状に施釉。口縁部内面と端部は釉薬を掻き取り、畳付部には目跡が残る。

陶器灯明皿(41) 口径5.6cm、器高2.8cm、底径5.3cm。上皿内面には暗黄褐色の不透明釉を薄く施釉。下皿の口縁部内面から体部外面は露胎。口縁端部と底部には重焼きの痕跡が残る。

陶器壺(44・47) 44は口径7.7cm、器高9.7～9.9cm、胴部最大径9.5cm、底径7.2cm。短い頸部を有し、肩はやや張っている。胴部はわずかに内湾しながら直線的に大きめの底部へ続く。底部は左回転の糸切り離し。胎土には長石・石英砂を含む。暗赤褐色で焼成良好。釉色は暗緑褐色で体部下半から上部に施釉する。47は口径18.8cm。中型の壺である。筒状の短い頸部を有す。胎土および器面は暗褐色で、表面には薄く鉄釉がかかる。内面には叩きの痕跡が残る。

陶器德利(45) 口径約3cm、器高22.5cm以上、胴部最大径12.0cm、底径8.8cm。器壁は薄手である。全体に薄く褐釉を施釉し、口縁部から体部上半に黒色釉を施釉。体部下半部にはヘラ沈線の窪みに黒釉を埋めている。胎土は灰色で、良く焼きしまる。

陶器播鉢(48・49) 48は口縁端部が玉縁状に肥厚するもので、暗褐色の鉄釉を薄く器面全体に施釉する。49は口径35cm。底部は肥厚しながら水平に端部を引き出している。口縁外面には断面三角形の突帯を貼り付けている。鉄釉は非常に薄く、口縁端部内面から体部上半部にかかる。

近世瓦(50・51) 50は丸瓦である。長さ26.6cm、最大幅13.9cm、最小幅11.6cm。玉縁の幅8cm、高さ7.1cm。外面中央に印判による瓦師銘が残っている。51は軒丸瓦片である。瓦当面には、比較的長い尾の三巴文を配している。瓦当の直径は14.2cmほどである。焼成はやや悪く、もろい。

3) 第3層出土遺物(Fig.11・12、PL.7)

第3層からは古代瓦、宋代龍泉窯系青磁、越州窯系青磁、近世瓦、近世土師器(皿)等が二次的な混入の状態出土した。

陶器白釉椀(52) 口径10.0cm、器高4.9～5.3cm、高台径4.1cm。体部は扁平な球形で、口縁部はやや強く内径する。高台部分以外に厚手の灰白～白色の釉薬を施釉。氷裂がやや顕著。胎土はややきめが粗く暗灰色。良く焼きしまっている。

越州窯系青磁椀(53) 底部径10.1cm。胎土はきめがやや粗く、黒褐斑が目立つ。底部は露胎でやや上げ底気味。内面は黄灰褐色で目跡が残る。

4) 土壌SX896(Fig.8、PL.2)

調査区北側に位置する。調査区壁にかかっており、全体の1/3ほどを確認した。推定長径約2mの不

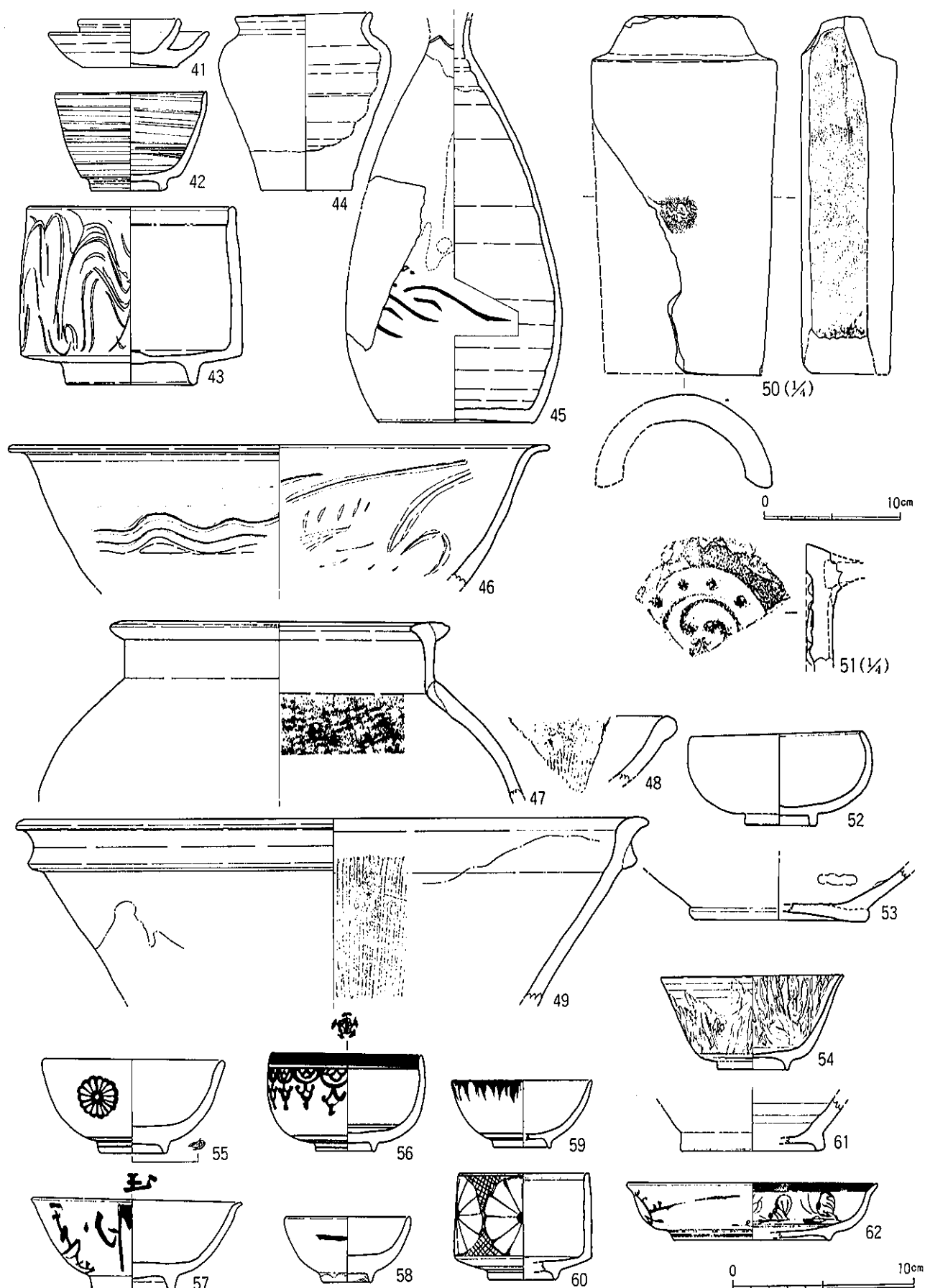


Fig.11 第1区出土遺物実測図2 (1/3・1/4)

整な楕円形の土壌である。大量の肥前系陶磁器が出土している。遺物および層位関係から幕末～明治期初頭のものと思われる。第2層北側やSX900等で出土した遺物の多くは本来この土壌に捨てられたものと思われる。

SX896出土遺物 (Fig, 11, PL, 7)

陶器碗(54) 口径10.2cm、器高5.3cm、高台径3.7cm。内外面とも暗茶褐色の釉薬の上に白釉を刷毛先で押し付けながら施釉。外面下端は回転による。胎土は灰褐色で良く焼きしまっている。

染付碗(55～57・60) 口径7.4～11.1cm、器高5.2～5.9cm、高台径3.1～4.8cmを測る。55には印判による菊花、56には輪宝繁文、57には吉祥句、60には菊花文を描いている。

染付盃(58・59) 口径7.1～7.8cm、器高3.6～3.7cm、高台径2.8～3.3cm。58は松文が、59には雨降文が淡い青色の呉須で描かれている。58の高台畳付には砂粒が付着。59の器壁は薄手で釉上がり良。

越州窯系青磁水注または壺(61) 高台径8.0cm。内面は露胎、外面には半透明の灰緑色の釉薬がかかる。高台畳付には目跡を残す。

5) 石垣SX897 (Fig, 8・9, PL, 2)

現在のフェンスを設ける以前にあった昭和後期の石垣である。

6) 土壌SX898 (Fig, 8・9, PL, 2)

SD901を切って掘削された廃棄用の長方形の土壌で、昭和20年代以降のものである。

7) 土壌SX899 (Fig, 8・9, PL, 2)

SX900を切って掘削された廃棄用の円形土壌である。昭和20年代のものと思われる。

土壌SX899出土遺物 (Fig, 11)

染付中皿(62) 口径12.0cm、器高3.2cm、高台径8.8cm。口縁部は強く外反する。内面には蝶文を連続して描いている。

8) 土壌SX900 (Fig, 8・9, PL, 2)

調査区北西部の壁にかかって検出した。かなり大型の竪穴で、木炭や焼土を多く含む。昭和20年代前半の廃棄用土壌と思われる。

SX900出土遺物 (Fig, 12, PL, 7)

陶器刷毛目手染付角皿(63) 現存長13.8cm、器高4.2cm、高台径6.0cm。暗茶褐色の釉薬の上に白釉を波状に刷毛で施文。内面は青海波を描きさらに明るい藍色の呉須で波を描いている。胎土は暗赤褐色で、良く焼きしまっている。良品である。

青磁短頸壺(64) 口径6.4cm、器高9.7cm、胴部径9.0cm、底径4.5cm。口縁部はほぼ直立する。肩の張りは弱い。底部から胴部下部は露胎。透明灰緑色の釉薬を施釉。

9) 石組遺構SD901 (Fig, 8, PL, 1・2)

第5層上面で確認された石組の溝または暗渠である。確認された長さは約5m、幅0.5mである。SX902の掘削時に壊され、中央から西側は石組が乱れている。主軸方向はN-93°-Wで、底板の標高は3m前後である。平成4年度の調査で、西側延長部が確認されている(SD370; Fig, 6)。その比高差は4.4mを測る。構築時期は遡っても幕末、または明治期の可能性が高い。

SD901出土遺物 (Fig, 12)

越州窯系青磁碗(65) 高台径14cm。胎土精良。焼成堅緻。緑褐色の釉薬が薄く全体にかかる。ヘラケズリによって低い輪高台を作り出している。内面および高台畳付に目跡が残る。

9) 竪坑遺構SX902 (Fig, 8・9, PL, 1・2)

調査区中央から西側に位置する。掘方の東側壁面は、整地層SX903を切って、ほぼ垂直に、深さ2.5mほど掘削している。西壁については未確認である。長軸の方向はN-18°-Wである。埋土は白色・黄白色風化頁岩小礫を含む赤褐色粘質土で、第3区SX908と同質である。戦中から戦後のものか。

SX902出土遺物 (Fig, 12, PL, 10)

陶器碗(66) 高台径4.9cm。やや大ぶりの碗である。黄白色の半透明釉を全面に薄くかけている。胎土はややきめ粗く、焼きしまりが弱い。

須恵器杯蓋(67) 口径15.7cm、器高2.6cm、つまみ径2.9cm。胎土は石英・長石細粒が多く混入している。焼成はやや軟質でもろい。色調は灰色。

軒平瓦(68) 瓦当の幅(高さ)3.6cm。中心飾の宝珠を中心として、左右対称に唐草文を配している。

軒平瓦(69) 内区は均正唐草文を配し、外区上縁には楕円形の扁平な珠文、下縁には鋸歯文を配した鴻臚館式軒平瓦である。厚さ4.4cm。焼成はややあまく黒灰色。平瓦の下面は縄目叩痕が、上面には布目圧痕を残す。側縁はヘラケズリによる調整。

11) 第5層(整地層SX903)(Fig.8・9、PL,2)

第5層は土塁状遺構SX904を覆う盛土である。黄白色～白色の風化頁岩、褐色粘質土を主とし、東から西側にかけて次第に厚くなっている。おそらく、SX904西側の窪地を平坦にし、地表レベルを高くするために造成されたと思われる。造成時期は幕末～明治期以降と考えられる。

SX903出土遺物(Fig.12、PL,8)

須恵器杯蓋(71) 扁平な宝珠形つまみを持つ。焼成はややあまくもろい。色調は青灰色。

白磁碗(72) 口縁端部が外方へ水平に引き出され、体部内面の口縁部近くには細い界線を巡らす。胎土は細かな黒色粒を含む。釉色は透明な灰白色。

12) 土塁状遺構SX904(Fig.8・9、PL,1・2)

調査区東壁側で検出した。ほぼ南北方向に延びている。現在の福岡城土塁とは方向が異なっている。断面形は、東側は地形の改変が顕著であるために原状をとどめていないが、逆台形を呈していたものと思われる。第5層直下の第6層黒灰色腐植土層を旧地表土とすると、高さは西側平坦面から約1.7m以上が、基底部幅は6m以上が推定される。土層は調査区中央部で7層に分層できるが、いずれも人為的な盛土。最下層の風化頁岩礫を多く含む黄褐色粘質土上面(標高1.8m)から、中位には、約20cmほどの厚さで花崗岩風化土(真砂土)を用いている。

SX904出土遺物(Fig.12)

上面から龍泉窯系青磁小片、越州窯系青磁、古代平瓦(縄目・格子目)片が出土している。

軒丸瓦(70) 鴻臚館式軒丸瓦で、外区珠文帯のみの破片である。暗褐色粘質土から出土。

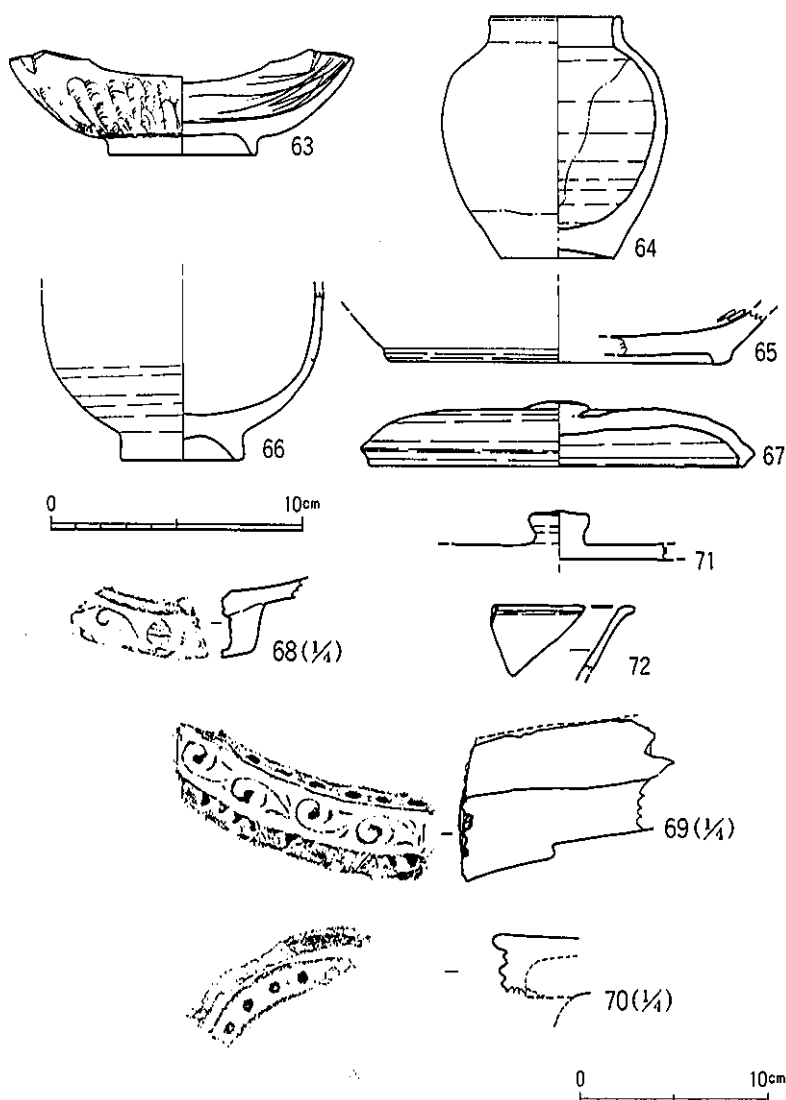


Fig.12 第1区出土遺物実測図3 (1/3・1/4)

3. 第2区の調査

(1) 調査区の位置 (Fig. 6, PL, 3)

当該区は、第1区と同じく、奈良時代の門跡(SB300)の南北中軸線から東側へ約20mの地点に位置している。この地点は、福岡城跡土塁頂部から内壁斜面上に位置しており、現況地表面の標高は9.7m前後を測る。第1区の現況地表面は4.3mであるので比高差は約5.7mである。調査区は、門跡(SB300)の東西中軸線に対して調査区を直交させ、前面に取り付くと想定される道路上遺構または溝状遺構の有無と、遺構検出面の遺存状況を確認するために設定した。調査面積は31㎡である。

(2) 土層堆積状況 (Fig. 13, PL, 3)

調査区北側では現地表(標高9.7m)から標高6.3mの面まで掘り下げた時点で、作業の安全面から中断した。南側では地表土および昭和20年代以降の攪乱土を除去し、土塁盛土上面を確認し調査を終えた。

土層は上層から、第1-1層20cm前後の地表土、第1-2層昭和20年代以降の攪乱土、第3層土塁盛土(風化頁岩礫を多く含む黄褐色粘質土)の3層に大きく分かれる。土塁盛土は、標高8.0m前後の水平面までが堅くしまっており、風化頁岩礫石が主となるが、それ以上の面では黄褐色粘質土が主で礫岩は少なくなり軟質である。

(3) 遺構と遺物各説

福岡城跡土塁に関しては、その構築が、土層観察の結果、標高8.0mの水平面で盛土整地を終えた後に一気に2m以上の土塁構築を行ったと考えられた。この状況は後述する第3区でもほぼ同様な堆積状況であり、基盤面の構築をある一定のレベル(約8~9m)で揃えたと考えられる。

掘り下げ作業は標高6.3mまで行ったが、所期の目的であった平安期以前の遺構検出面まで達していない。東門(SB300)周辺の検出面は標高8.3m前後であり、約20m離れた地点で少なくとも4m以上の比高差が、江戸時代初頭の福岡城土塁構築の時点ですでに存在していたことになる。これは、平成4年度調査時に確認された中世の溝SD244によって深くえぐられたか、福岡城築城前にすでに東門東側前面部分が急傾斜となっていたか、あるいは築城時の造成の結果、削平されたものと考えられる。

遺物は、表土および現代攪乱土層から古代瓦片を主として、近世瓦、染付、土師器、北宋代白磁、越州窯系青磁、磚等が若干出土している。いずれも二次的な混入品である。土塁盛土からは古代瓦と越州窯系青磁、北宋代白磁片が少量出土している。

1) 表土出土遺物 (Fig. 14, PL, 8~10)

軒丸瓦(73・74) いずれも三巴文である。73は巴頭が左回転で、珠文数は9、74は右回転で珠文数は12である。瓦当面の直径は73が14cm、74が14.1cmである。江戸時代後期以降のものと思われる。

平瓦(75) 上面に布目圧痕、下面に縄目叩き痕を残す厚手の平瓦である。厚さ5cm。鴻臚館跡出土の平瓦では最も大きな部類のものである。胎土には砂粒を多く含み焼成はややあまく、もろい。側縁はヘラケズリによる成形。

瓦磚(76) 厚さ5.6cm、現存長11.9cm、現存幅10.5cm。胎土はやや粗く、砂粒を多く含む。焼成は悪く、もろい。表面は黒褐色。

白磁碗(77) 復元口径15.3cm。細い玉縁口縁を有する良質の白磁である。胎土精良、淡く黄白色がかった透明釉を施釉。

越州窯系青磁碗(78~81) 78は口縁部破片である。口径15.8cm。黄緑釉が薄くかかる。79~81は底部破片である。79は輪高台で、焼成、釉上がりとも良好。80は蛇ノ目高台状に削りだしたもので、疊付外縁と内底に目跡を残す。81はやや上げ底の平高台で80と同様に目跡を残す。80・81の胎土には細かな黒色斑がみられる。

2) 土塁盛土出土遺物 (Fig. 14, PL, 9)

越州窯系青磁碗(82~90) 胎土および釉薬の差異から精製品と粗製品の2類に分けられる。精製品は内面に目跡を残すもの(87・88)と残さないもの(85・86)に細分できる。胎土は精良である。いずれも輪高台。粗製品は82~84、89・90で、黄褐色~黄緑灰色がかった透明釉を施釉している。

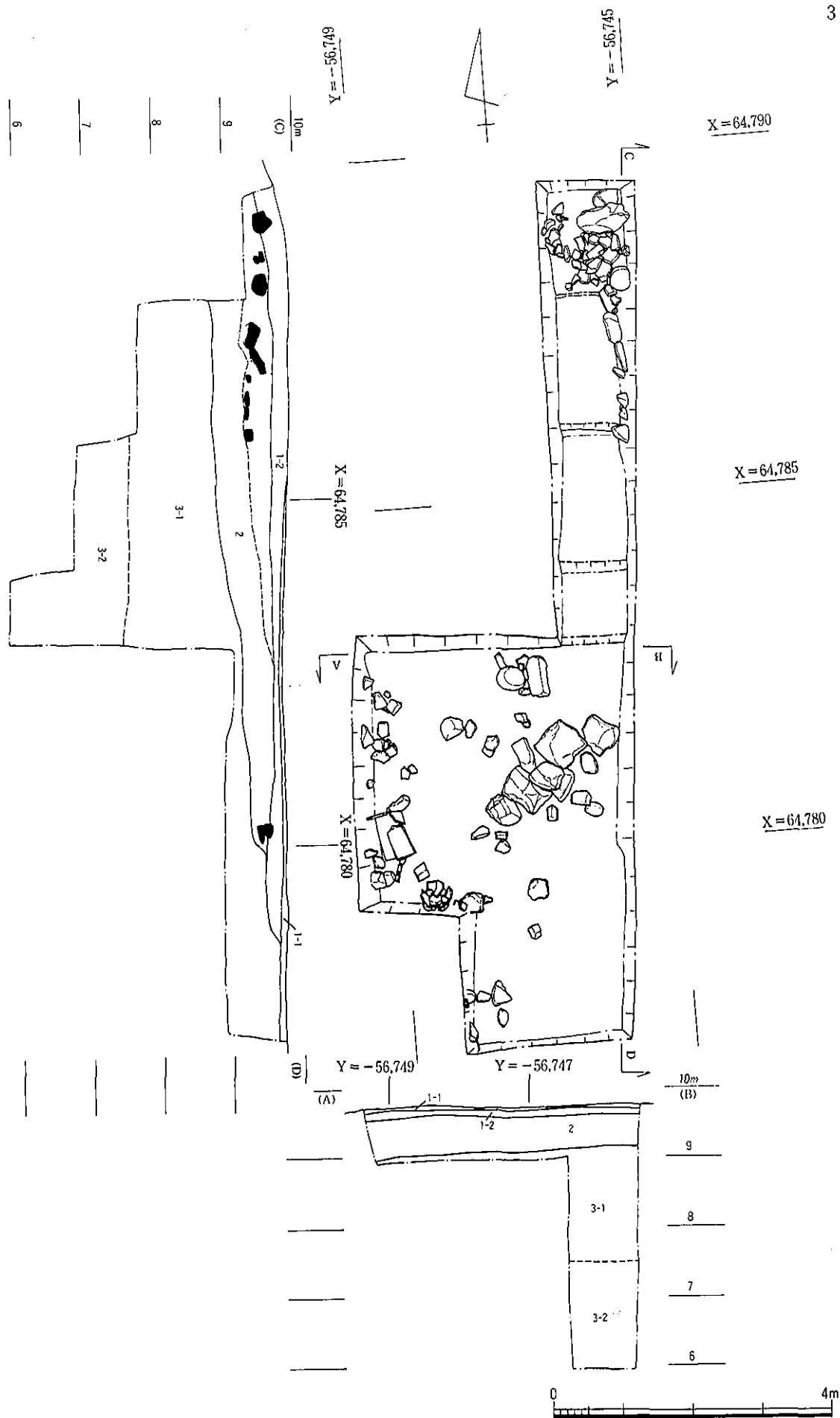


Fig.13 第2区遺構平面および土層断面図 (1/80)

輪高台状にケズリ出したもの(82・84)、やや上げ底気味のもの(83・89・90)がある。体部下部から底部は露胎である。胎土は焼成温度が低いためにガラス化が進んでおらず、肉眼観察では鉄分の吹き出しと思われる黑色斑を含む。

越州窯系青磁水注(91) 底部径9cm。胎土はきめ粗く、黑色斑が点在する。釉薬は黄緑灰色で体部上半部にかかる。底部は平高台で中央は上げ底となっている。

白磁碗(92) 高台径7cm。薄く黄白色がかった透明釉を施釉する良質の白磁である。ケズリ出しによって蛇ノ目高台とし、全面施釉後、畳付部は搔き取っている。

軒丸瓦(93) 複弁八葉の蓮弁文を配する鴻臚館式瓦である。中房は平坦で蓮弁文帯よりやや低い。焼成はあまく軟質である。黒灰色。

平瓦(94) 下面に格子目叩き痕および「賀」銘を、上面には布目圧痕を残す。焼成は良好で強く焼きしめる。灰色～青灰色。

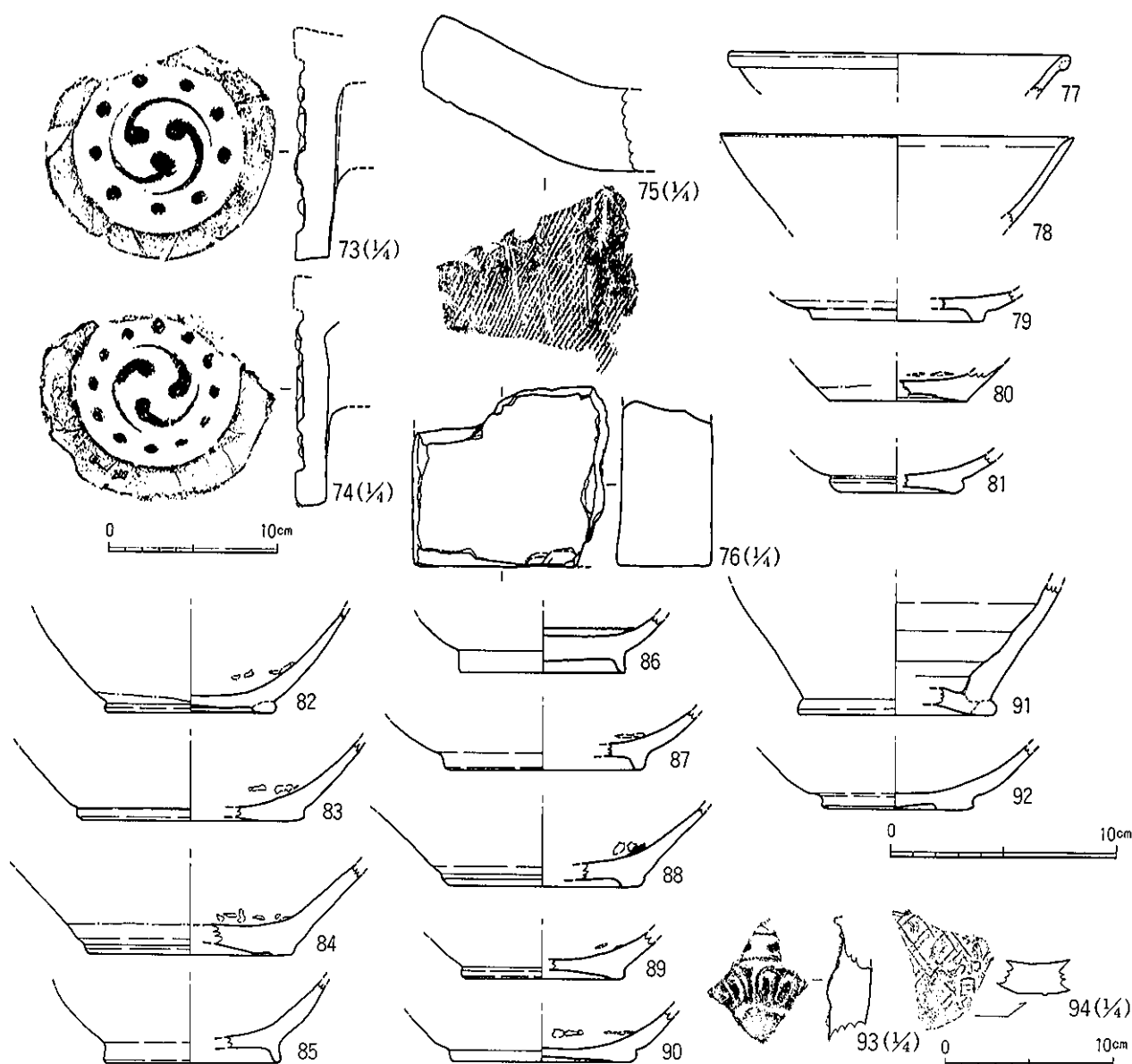


Fig.14 第2区出土遺物実測図 (1/3・1/4)

4. 第3区の調査

(1) 調査の目的

第Ⅰ期整備地は、江戸時代には、家老職を務めたこともある大音家の屋敷地にほぼ相当している。この屋敷地は福岡城跡二の丸御門の東隣に位置し、二の丸正面と水の手守備にあたって重要な地点を占めている。この屋敷地の東縁と南縁に沿って大規模な土塁が構築されており、平成2年度の調査ではその盛土下部から平安時代の推定南門基壇跡の一部が、平成8年度には奈良時代の布掘遺構の一部が確認された。これにより、土塁の下部に筑紫館から鴻臚館までの各時期の何らかの外郭施設の存在が考えられ、平成8年度に引き続いて土塁東端部における遺構の確認を目的として調査を実施した。

(2) 調査区の位置 (Fig.15, PL, 4)

当該区の設定にあたっては、平成2～3年度の調査によって確認された推定南門基壇の南北中軸線を基準として、平安時代の礎石建物群の一つである建物SB31を東側へ対称に折り返した地点の南側延長上、推定軒廊 (SB50) 中軸線から南に約30mの位置に設定した。当該地点は土塁の頂部から外壁斜面上を跨いでおり、土塁をほぼ南北に横断する形となった。現況地表面の標高は最頂部で11.4m、土塁外壁下端で3.2mを測る。調査面積は101㎡である。

(3) 土層堆積状況 (Fig.16, PL, 4・5)

第3区の土層は大きく8層に分けられる。上層から、第1層昭和期盛土、第2層表土 (黒色～黒褐色土層)、第3層赤褐色～黄褐色粘質土 (SX908埋土)、第4層土塁盛土、第5層室町時代～江戸時代初頭遺物包含層 (灰色砂質土層)、第6層奈良平安～室町時代遺物包含層 (黒褐色粘質土)、第7層平安時代遺物包含層 (暗褐色～暗赤褐色粘質土)、第8層赤褐色粘質土 (黄白色～白色風化頁岩小塊を含む盛土層) である。

第3層は、豎堀SX908の埋土である。4層に細分できるが、一括して埋め戻された土層である。

第4層は6層に細分ができる。第4-1層赤褐色粘質土、第4-2層黄褐色粘質土、第4-3層黄白色風化頁岩礫層、第4-4層黄褐色砂質土、第4-5層暗灰色砂質土・灰色砂質粘土・暗褐色～黄褐色粘質土・風化頁岩小礫の混合土 (奈良時代から室町期の遺物を含む) である。第4-1層以外の土層は江戸時代の盛土と考えられるが、第4-1層は明治期以降に再構築したと思われる土層である。第4-2層は第4-3層以下と比べると軟質である。第4-3層は風化頁岩が主となり堅くしまっており、第2区での調査所見に等しい (18頁)。第4-4層は細かな砂粒を多く含む粘質土で、灰色粘質土や褐色粘質土が混入する堅くしまった土層である。第4-5層は調査区北端では第6層に、中央から北側では第8層に、SX908付近では第5層に直接盛土されている。これらの土層間是不整合面をなす。第4-5層を構成する暗灰色砂質土・灰色砂質粘土・暗褐色～黄褐色粘質土はいずれも、本来福岡城築城以前の堆積土であり、出土遺物からみて土塁内側にあった表土以下の軟質な土壌を削平し、平坦にした8層直上に突き固めて盛土したものと考えられる。第4-6層は、土塁下端部の二次堆積土である。

第5層はこれまでの調査で江戸期の遺構下部や、平安時代の遺構を覆って確認された土層で、石英砂や雲母片を含んでおり、花崗岩風化土 (真砂土) が混入している可能性がある。平成8年度調査では、同様に土塁盛土の基盤層として遺存していた。当該区では約5cm弱の厚さでSX908の北側壁でその一部が認められた。第5層は平成8年度の調査では第6層直上を覆っていたが、当該調査区北側では第6層上には認められず、またSX908北側では、第8層直上を覆っている。これは、第6層と第7層が削平されたためと思われる。

第6層は平成8年度の調査では第5層の下部に位置する遺物包含層で、奈良・平安時代の瓦をはじめとして、鎌倉・室町時代の遺物がわずかに混入している。第6層から第7層、第8層は漸移的堆積である。

第7層は本来第8層上面に堆積する土層で、腐植土壌化が進み、有機物による汚染によって黒みを増したと考えられる。瓦小片を含む遺物包含層である。

第8層は盛土層である。盛土時期については遺物をほとんど含まないために、現在までのところ明

確でないが、平成4年度調査時に確認された造成痕跡にみられた赤褐色粘質土や平成8年度の地山面直上を覆う赤褐色粘質土などと土質が共通していること、および上部の包含層のあり方からみて奈良時代まで遡る盛土層の可能性が高いと考えられる。

(4) 遺構と遺物各説

第3区においては、SX908以外には遺構は確認できなかった。所期の目的である平安時代以前の遺構については、当該区では認められなかった。

1) SX908 (Fig.16, PL, 4・5)

福岡城土塁に沿って掘削された長大な竪坑である。南北の壁面はほぼ垂直に掘削している。両壁には土止め用の木杭・板材の痕跡が残る。壁間2.5～2.6m、深さは北壁で3.9m、南壁で3.9m。床面には幅約15cm、深さ4cm前後の溝が格子状に掘られ、底面には砂が薄く残っていた。床面直上から銃弾・銅線・碇子・銅製ピンセット・ガラス片が出土。旧陸軍二十四連隊が駐屯するにいたった明治後期以降～昭和期、もしくは戦後間もない時期のものと考えられ、掘削の状況と埋土が共通していることから、第1区で検出したSX902と一連のものである可能性が高い。

2) 表土出土遺物 (Fig.17, PL, 9・10)

龍泉窯系青磁碗(95) 口径13.8cm。薄く青緑がかった透明釉を全面に施釉する。口縁部外面には雷文を、また体部には蓮弁文をヘラ描きしている。

白磁碗(96) 高台径7.9cm。薄く青みがかった透明釉を全面施釉後、高台畳付部は掻き取っている。内面見込には界線をめぐらす。

越州窯系青磁碗(97・98) 97は高台径8.4cm。輪高台はハの字形に外側に広がる。内面見込には界線状の弱い段をめぐらしている。目跡が内面見込と高台畳付部に残る。胎土には細かな白砂を含む。釉色は黄緑灰色で釉上がりはやや悪い。98は高台径8.0cm。上げ底で高台断面は三角形を呈す。体部下半から底部は露胎。内面見込に目跡が残る。釉色は黄灰色から黄緑灰色で、ほとんど剥落している。

軒丸瓦(99) 瓦当復元径約15cm。中房に1+4の蓮子を配している。弁区には単弁を14配し、さらに外縁に同様な珠文を配している。瓦当面は平坦で、文様の彫りは浅く雑である。焼成は須恵器質で良く焼きしまっている。色調は灰色。丸瓦外面には格子目叩き痕が残る。

3) 福岡城土塁盛土第4～5層出土遺物 (Fig.17, PL, 9・10)

龍泉窯系青磁皿(100) 底部破片である。内底に印判による草花文を施文し、厚手の釉薬をかけている。外底は露胎である。

陶器播鉢(101) 自然釉が薄くかかる口縁部外面下端はわずかに下方に引き出されている。降ろし目は9条が1単位。胎土は石英砂粒を含みやや粗いが、堅く焼きしまっている。赤褐色。

越州窯系青磁碗(102～104) 102は高台径8.0cm。やや上げ底の平高台で、内面見込には目跡が残る。胎土はやや粗く黒色斑が目立つ。103は高台径7.6cm。高台は外方に強く張り出している。胎土はやや粗く、茶褐色粒を含む。内底見込に目跡を残す。104は高台径9.0cm。ヘラケズリ出しにより低い輪高台を作る。焼成は良好で、釉色は緑色である。内底見込および高台外縁には小さな目跡が残る。

越州窯系青磁鉢(105) 底部径8.4cm。全面に緑色～緑灰色の釉薬を施釉。釉薬の発色はやや悪い。低い高台畳付部は掻き取っている。内底および底部外縁に目跡を残す。

須恵器甕(106) 口縁部径23.0cm。内外面とも横ナデ。口縁部外面には自然釉が薄くかかる。

軒丸瓦(107) 瓦当面推定径は約15cm。おそらく複弁を意識した単弁蓮華文(12葉)を配する。外周は欠失。焼成はあまく、もろい。

軒平瓦(108) 均正唐草文を配している。下縁には下向きの陽起鋸歯文を配している。

平瓦(109・110) 109は下面に縄目叩き痕を、110は格子目叩き痕を残す。焼成はいずれも良好。

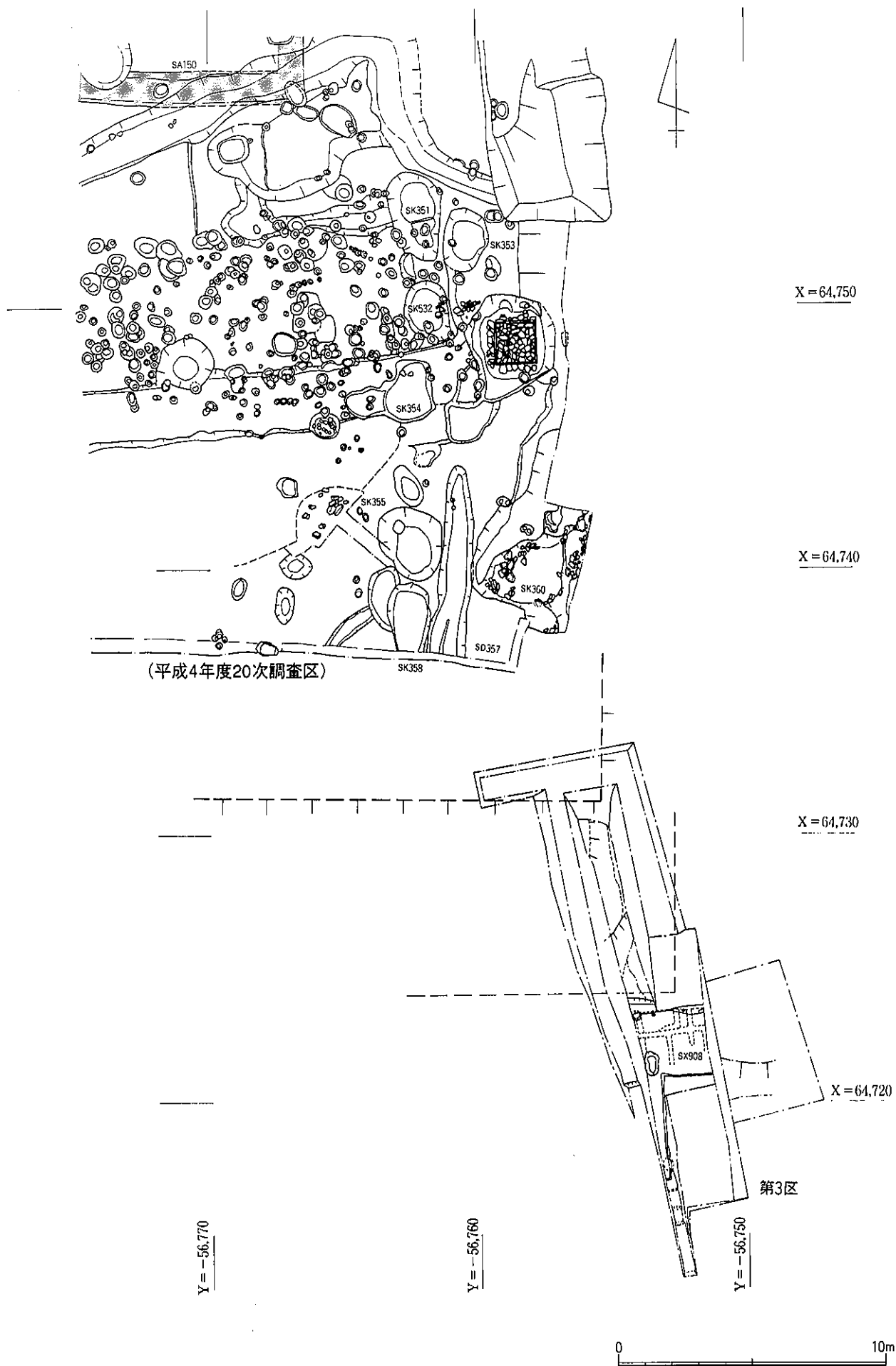


Fig.15 第3区配置図 (1/200)

第2章 調査の記録

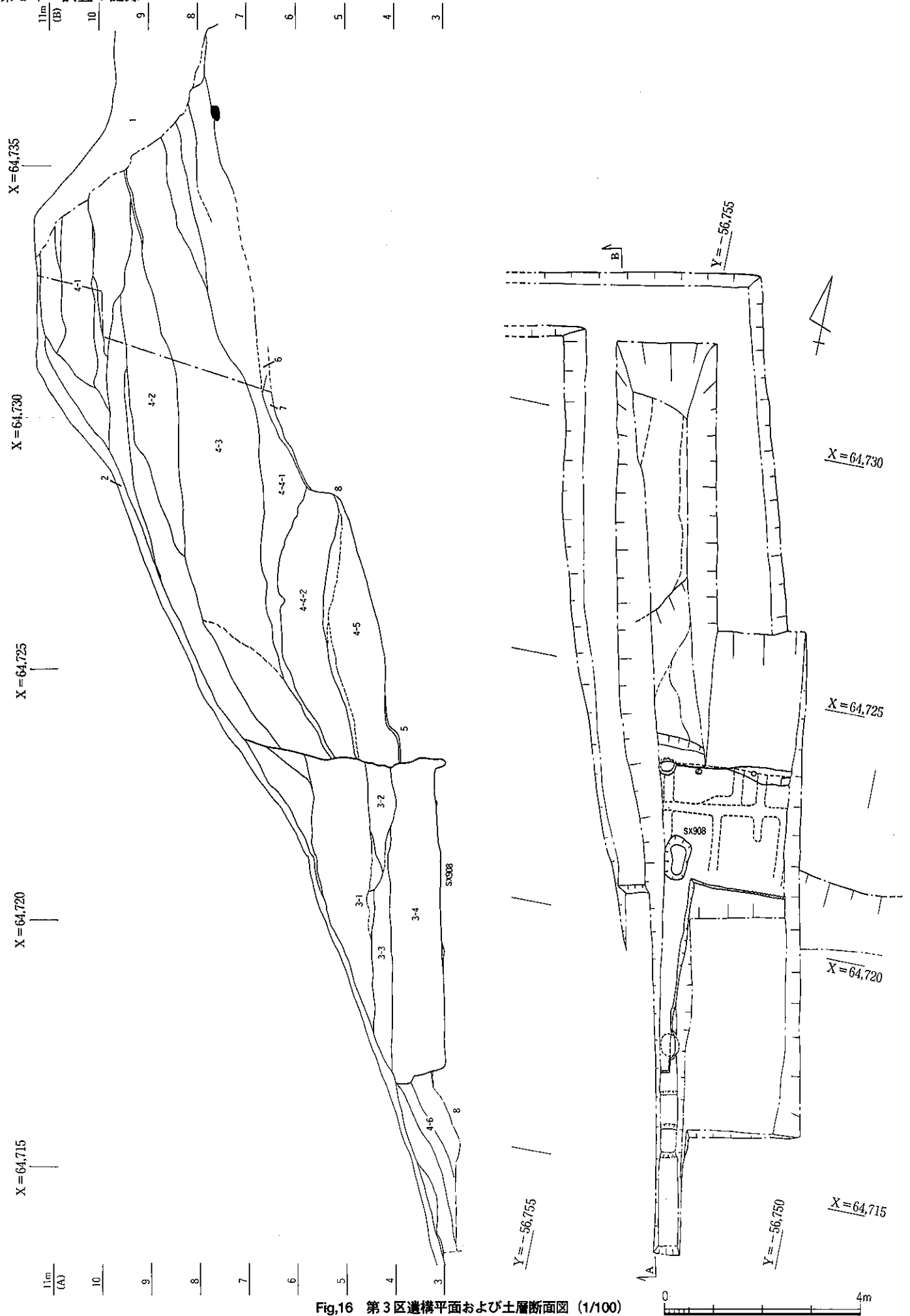


Fig.16 第3区遺構平面および土層断面図 (1/100)

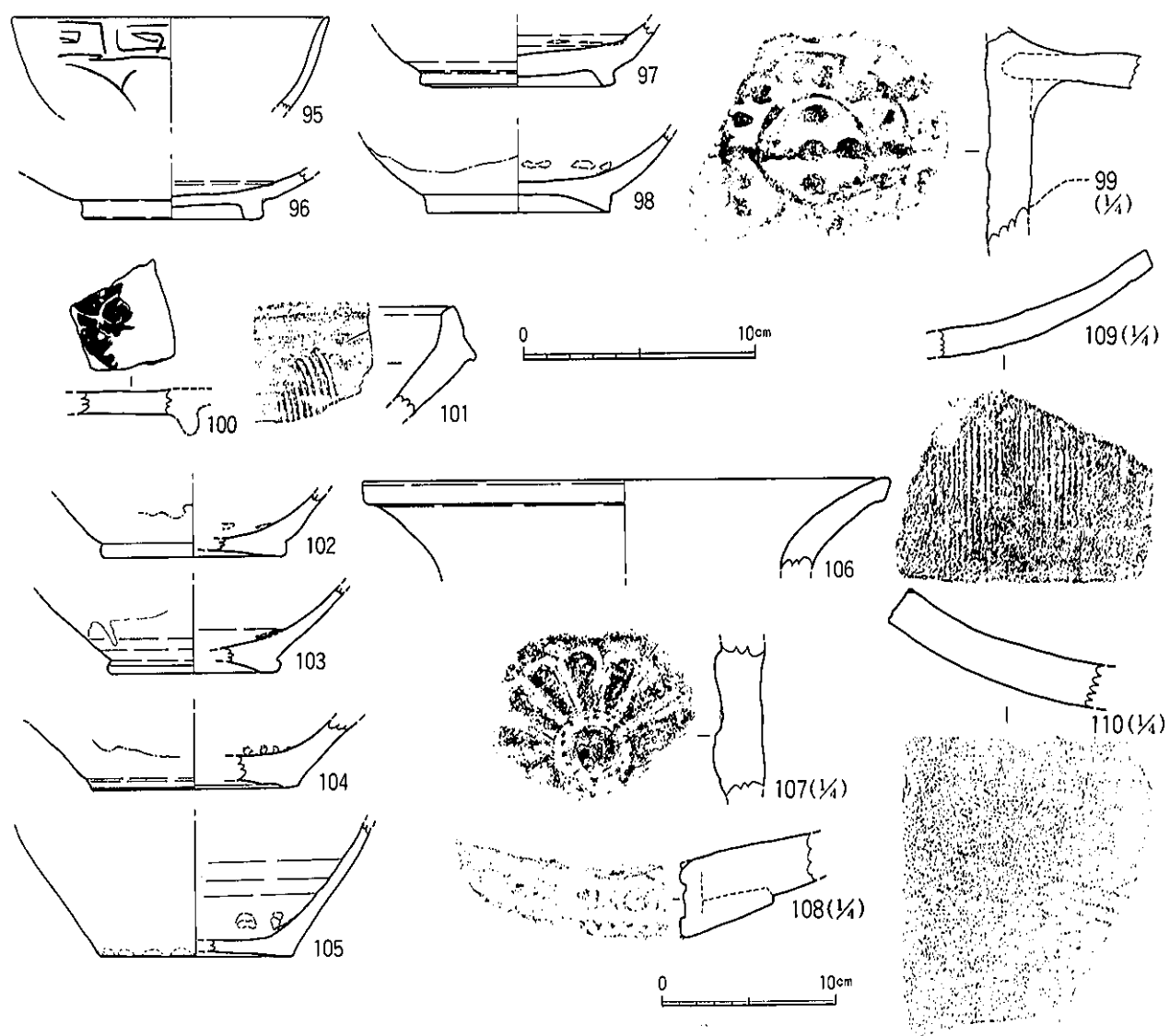


Fig.17 第3区出土遺物実測図 (1/3・1/4)

第3章 結語

ここでは、前章の平成9年度調査結果を踏まえ、平成7年度から実施してきた平和台野球場外周南側から東側における福岡城跡土塁下部での遺構のあり方とB群遺構の規格性について検討する。

1. 平成9年度調査のまとめ

第1区では、明治期以降から昭和期の撓乱土城、構築時期が江戸時代以前と考えられる土塁状の高まり(SX904)等を確認し、古代から中世の遺物の出土をみたが、江戸時代よりも古い遺構は認められなかった。また第2・3区では、これまでの調査成果と合わせ、鴻臚館跡周縁の地形復元の手がかりを得られた。

構築時期が、江戸時代初頭以降と考えられる第1区SX904は、断面形が逆台形をなす土塁状の高まりである。第三紀風化頁岩礫を含む黄褐色粘質土(盛土)上面に、基底面幅9m以上、高さ2mほどの規模が想定される。外壁部分は近代以降に改変を受けており明確ではない。江戸時代初頭の城郭縄張を画する小堤、あるいは内堀腰巻石垣上の堤と考えると、城郭外周を巡る内堀内壁に沿って、周堤状の高まりがあったことになる。これまでの福岡城跡の土塁部分の調査では確認された例はなく、また、福岡城絵図にもこの地点周辺に類似の図示例はないことから、構築時期の上限の問題も含めて、その性格については、周辺調査を待って判断したい。なお、この土塁状の高まりは明治期まで存続していたものと思われる。

遺物では、第1区から江戸時代の大身武家の生活具の一端を知る上で重要と思われる、18～19世紀までの波佐見焼、唐津焼、有田焼、現川焼等の肥前系陶磁器、高取系陶器、瀬戸焼等が出土した。

中世の遺構は確認できなかったが、遺物には宋代の白磁や元代の龍泉窯系青磁が若干出土している。

鴻臚館跡に関しては、外縁東南部コーナーの廃絶後の地形改変の過程を考える手がかりが得られた。

第2区および第3区北壁の土層堆積状況と、平成3年～4年度調査区東側縁辺部における遺構検出面の状況を見ると、鴻臚館跡遺構B群の東門(SB300)および堀の南北中軸線から東へ約12mほどの地点で、東側に向かって急激に低くなる傾斜変換線があり、南北に延びている。また、第3区では、その西壁北端部に東南から南へ向けて下がり始める傾斜変換点があり、先の傾斜変換線の南端と結ばれ、やや不明確であるがコーナーを形成している(Fig. 15)。平成4年度調査区はこのコーナーの内側にあたり、検出された遺構はコーナー内側の平坦面(第3区西壁の第8層に相当する遺構面)上に分布している。第8層は奈良時代もしくはそれ以前まで遡る盛土である(21～22頁)。なお、この地形変換ライン上に福岡城跡土塁は構築されていることになるが、この傾斜面、およびコーナーの形成時期およびその性格が問題となる。

これについては、①コーナー内側南東部にあたる平成4年度調査SK360の遺構上面と、本年度第3区第6層(黒褐色粘質土)上面は下部の盛土傾斜とほぼ合致している、②土塁構築にあたって傾斜面を一部削平し、新たな整地層(第3区第4・5層)上面に土塁盛土が覆っている、③SK360と第6層には鎌倉時代後期の遺物が含まれているが、近世のものは含まれていないことから、福岡城築城時あるいはその前までにすでに傾斜面となっており、その上限は鎌倉時代後期頃以降と推定できる。

この傾斜面が作るコーナーの位置は、平成元年～2年度調査で確認された南門推定基壇の南北中軸線を基線として、礎石建物SB31を東側へ対象に折り返した地点の東側延長線上と、基壇東西中軸線の東側延長線の交点、すなわち鴻臚館外周推定コーナー位置よりも北西内側に位置し、推定基壇北縁の東側延長部に相当している。したがって、東側斜面と南側斜面が交差し形作るこのコーナーは、平安期の鴻臚館施設の外縁東南部ではなく、おそらく鎌倉期以降福岡城築城までの間に削りだされた人為的な造成によるものと思われる。南門推定基壇東側から当該区およびその周辺は、かなりの削平を受けていることが考えられる。

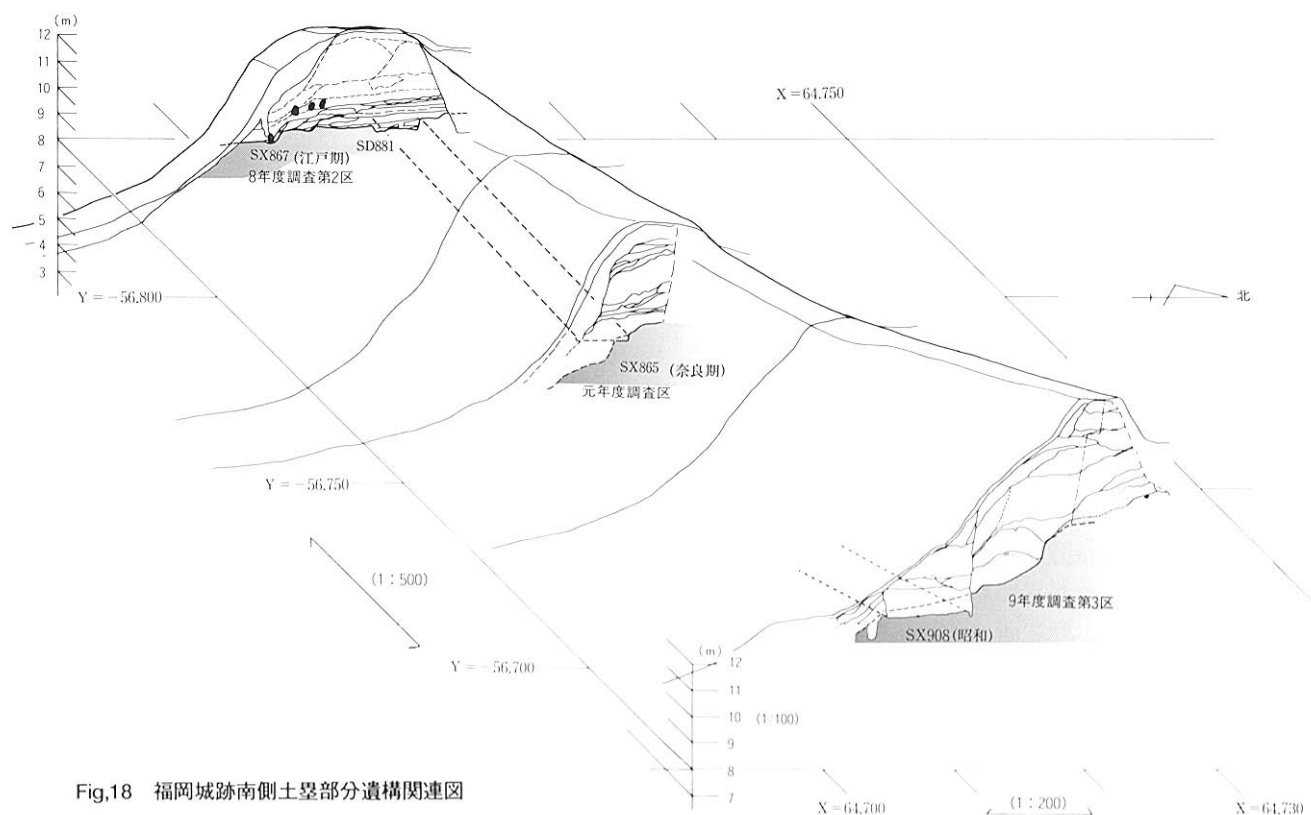


Fig.18 福岡城跡南側土塁部分遺構関連図

2. B群遺構の平面構成

本年度の第1～3区は、これまでに確認された遺構群の平面構成に何らかの規格性がうかがわれないか検討した上で設定した。検討したのは、奈良時代のB群遺構と平安時代のC群遺構である。ここでは、全体構成がある程度復元できるB群遺構について、検討結果とその平面構成の試案を提示しておく。なお、検討にあたっては、20分の1実測図で遺構の座標値を求め、使用尺を1尺=29.8cmとして算出した。

鴻臚館跡関連遺構群の時期区分

平成4年度までの調査では、平和台野球場外野席および旧テニスコート部分で検出された遺構群を第Ⅰ期～第Ⅳ期遺構に分け、第Ⅰ・Ⅱ期を奈良時代とし、Ⅰ期が布掘地業を持つ塀と東門およびトイレ遺構など、Ⅱ期が掘立柱建物群に分け、第Ⅲ期・第Ⅳ期を平安時代とし、礎石建物および推定南門基壇、土壇等を含む遺構群とした。その後の切合い関係や方向性

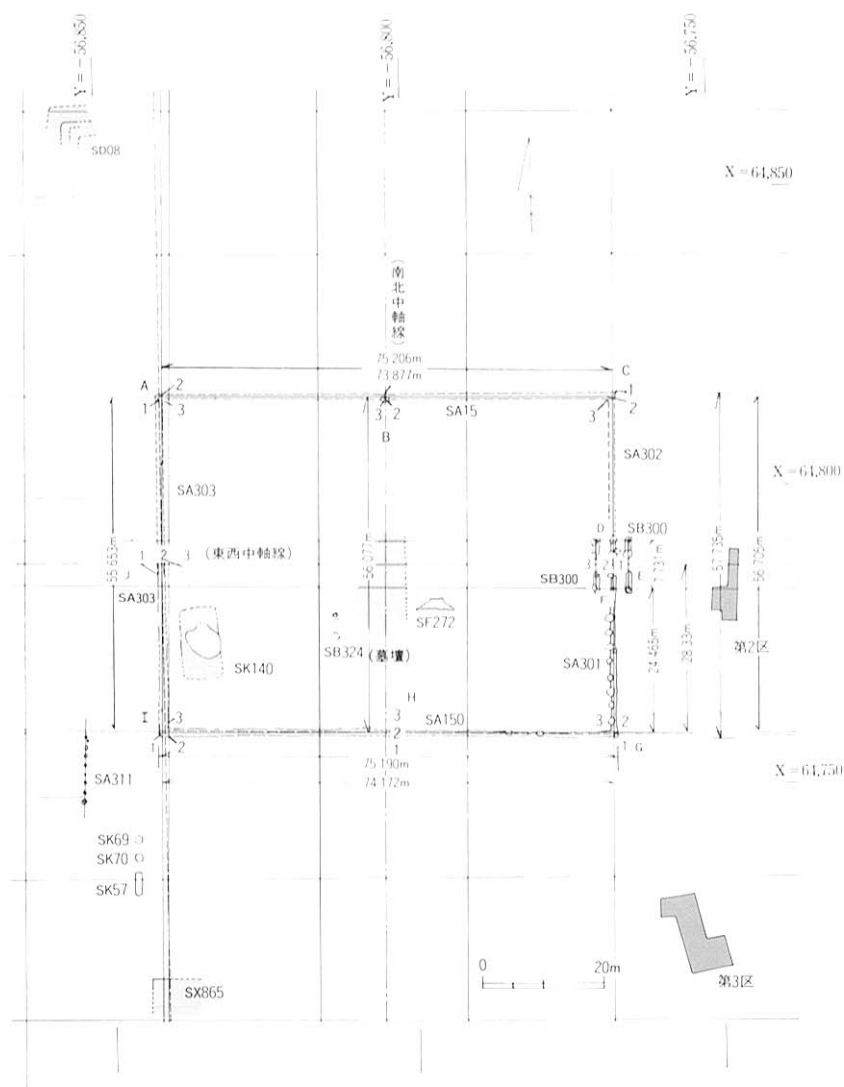


Fig.19 B群遺構平面略図

の検討の結果、第Ⅰ期をB群、第Ⅱ期をA群、第Ⅲ期をC群、第Ⅳ期をD群とした。先後関係は、それまで最も古いと考えていた第Ⅰ期遺構群(B群)を第Ⅱ期遺構群(A群)よりも後出で、第Ⅲ期(C群)礎石建物群は第Ⅰ期遺構群の平面規格を踏襲し作られた可能性があると考え、平和台野球場部分の調査における検討課題とした。

B群遺構の平面構成 東門および塀の細部規模はTab.4に示したとおりの数値を測る。北東隅部と北西隅部は未確認であるので、南北距離の実測値は、昭和62年末に確認されたSA15と平成2年～4年度に確認されたSA150間で、東西長については、SA150東西長とSA301とSA303間である。また北辺長も推定値である。これらをもとにした復元平面形は、東西に約75.2m前後、南北に約57m前後の長方形をなす。対応する各辺はわずかではあるが異なる値をとっており、東辺が西辺よりも約1m長い。推定値については将来の調査で補正が可能と思われる。

次に、全体の平面構成の数値上の比例関係を見てみる。

東辺中央に位置する東門の梁間長(間口長)7.731mを東辺長(C1-G1:57.735m)から差し引いた値を、2等分した長さ25.002m(83.9尺)を1単位とすると、北辺および南辺は、その3倍の値にほぼ等しい。さらに、塀北西コーナーを起点として北へ2単位、西へ1単位とった地点に昭和62年末に確認された溝状遺構SD08が、また塀南西コーナーを起点としてほぼ真南へ2倍とった地点に布掘遺構(SX865)が位置している。このようにみると、B群遺構は83.9(≒84)尺を1単位として平面構成が計画されたことがわかり、南北に84尺×6+26尺=530尺(157.94m)以上、東西に84尺×4=336尺(100.13m)以上の平面規模が想定できる

これらの妥当性については野球場跡地の将来の調査結果を踏まえながら検討してゆきたい。

Tab.4 B群遺構(東門・塀)各部座標値および計測表

遺構名	測点位置	測点	座標値		長さ(m)		備考
			X値	Y値			
SA15 北辺	北西端 A	A1	64,817.060	(-56,840.190)	A1-C1	75.206	推定値
		A2	64,816.440	-56,869.370	A2-C2	73.877	推定値
		A3	64,815.940	-56,838.780	A3-C3	72.709	推定値
	中央 B	B1	64,815.880	-56,802.800	B1-H1	57.103	
		B2	64,815.360	-56,802.810	B2-H2	56.077	
		B3	64,814.920	-56,802.815	B3-H3	55.142	
塀東辺と東門	SA302 東辺北	C1	64,815.100	-56,765.010	C1-G1	57.735	推定値
		C2	64,814.460	-56,765.520	C2-G2	56.705	推定値
		C3	64,813.880	-56,766.100	C3-G3	55.737	推定値
		C1	64,815.100	-56,765.010			
		C2	64,814.460	-56,765.520	C2-D	24.509	推定値
		C3	64,813.880	-56,766.100			
	SB300 東門	D	64,789.960	-56,766.195	D-F	7.731	(26尺)
		E1	64,786.095	-56,765.755	E1-J1	75.191	
		E2	64,786.099	-56,766.245	E2-J2	74.041	
		E3	64,786.122	-56,766.740	E3-J3	72.875	
	SA301 東辺南	F	64,782.230	-56,766.305	F-G2	24.465	
		G1	64,757.385	-56,766.530			
		G2	64,757.775	-56,767.010			
		G3	64,758.160	-56,767.475			
	SA150 南辺	H1	64,758.785	-56,803.735			
		H2	64,759.290	-56,803.700			
		H3	64,759.785	-56,841.660			
		I1	64,760.390	-56,841.120	I1-G1	75.190	
		I2	64,760.845	-56,841.005	I2-G2	74.172	
SA303 西辺	中央 J	I3	64,761.198	-56,840.935	I3-G3	73.593	
		J1	64,787.390				
		J2	64,787.360	-56,840.275			
SA303 西辺		J3	64,787.340	-56,839.605			
					A1-I1	56.689	推定値
					A2-I2	55.653	推定値
					A3-I3	54.787	推定値

※A-Jのアルファベットの枝番号は1が遺構外縁を2が推定柱芯を3が遺構内縁を表わす(Fig.19)。

図 版

(PLATES)



(1) 第1区調査前現況（南から）



(2) 第1区調査終了後全景（南から）



(3) 第1区調査終了後全景（西から）



(1)



(2)



(3)

- (1) 第1区SD901検出状況（東から）
- (2) 第1区SX904およびSD901検出状況（南から）
- (3) 第1区SD901検出状況（南西から）
- (4) 第1区SX904検出状況（南から）
- (5) 第1区SX904土層断面（南西から）



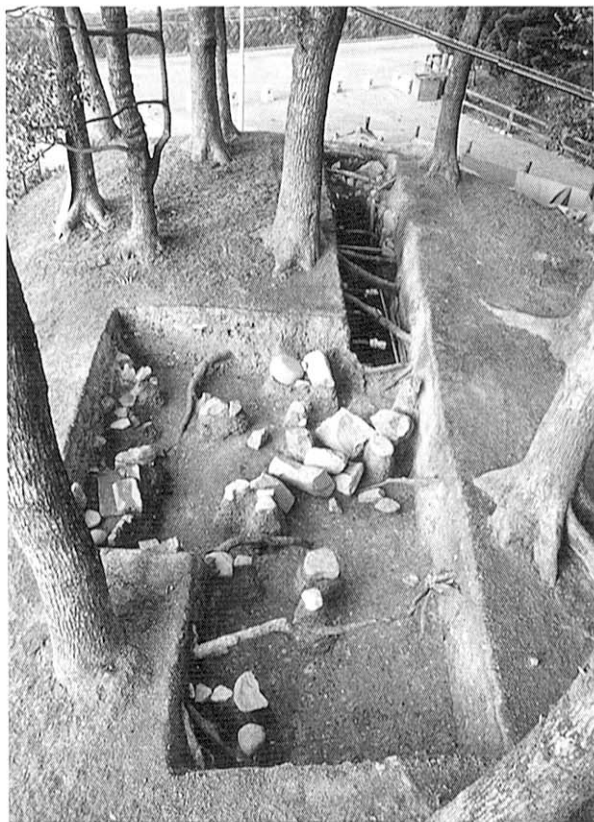
(4)



(5)



(1)



(3)



- (2) (1) 第2区調査前現況（南から）
(2) 第2区調査終了後全景（南から）
(3) 第2区北側トレンチ掘削状況（北から）
(4) 第2区作業風景（南から）

(4)



- (1) 第3区調査前現況
(北西から)
- (2) 第3区調査終了後全景
(南から)
- (3) 第3区掘り下げ状況
(南東から)
- (4) 第3区北側奥壁土層断面
(南から)
- (5) 第3区南側赤褐色粘質土
上面
SX908検出状況 (南から)

(1)



(2)



(4)



(3)



(5)



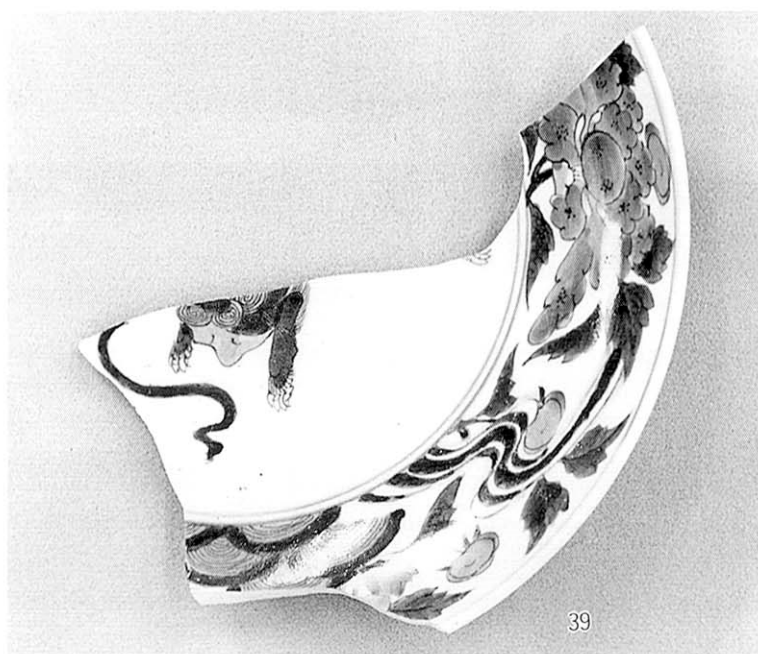
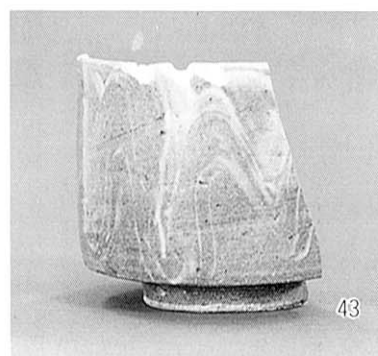
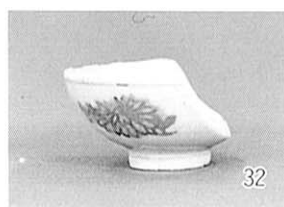
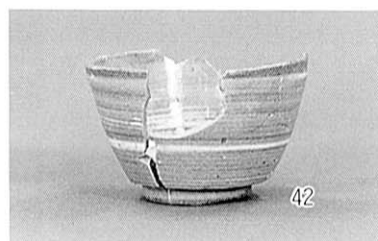
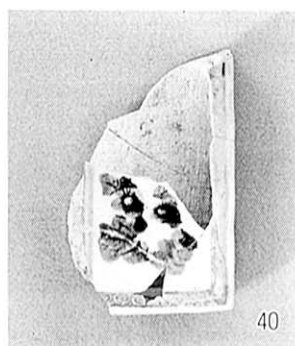
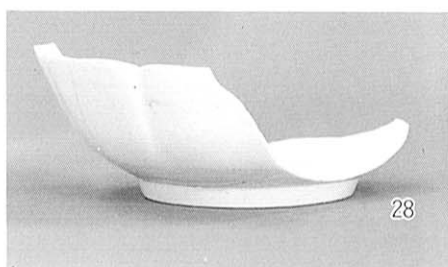
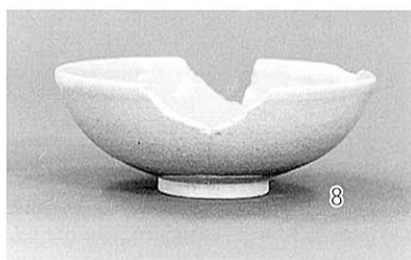
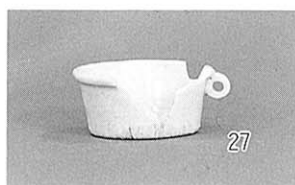
(1) 第3区西壁、SX908土層堆積状況（南東から）

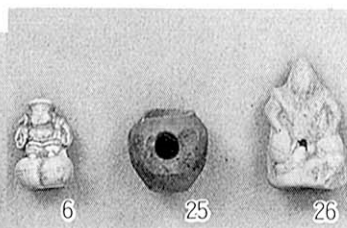
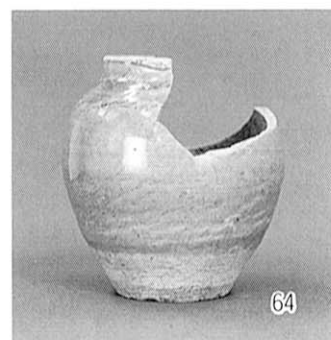
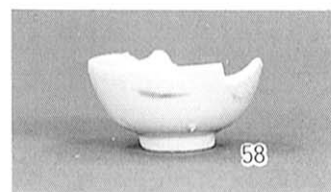
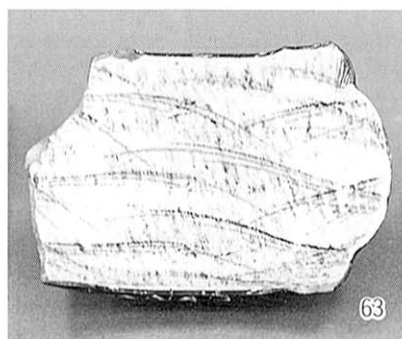
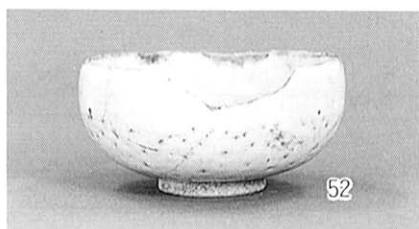
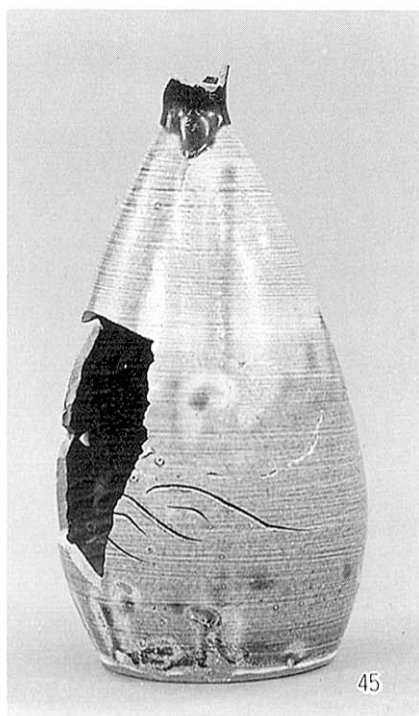


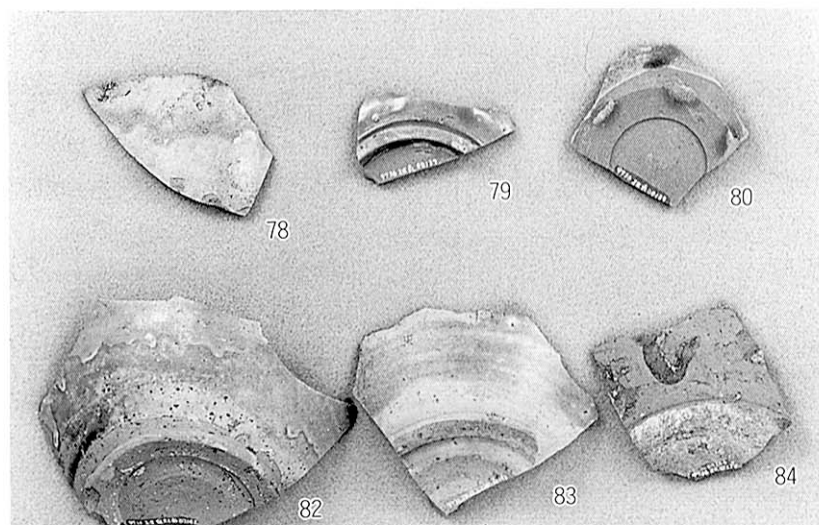
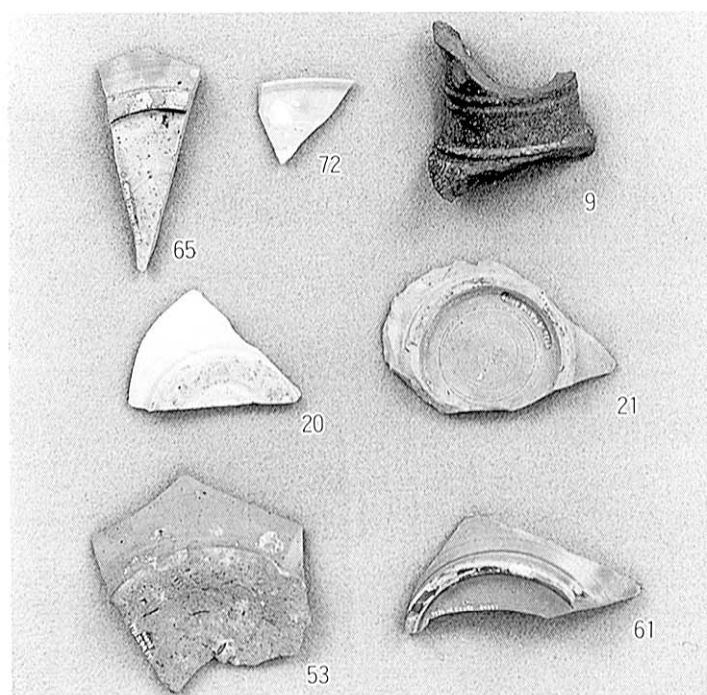
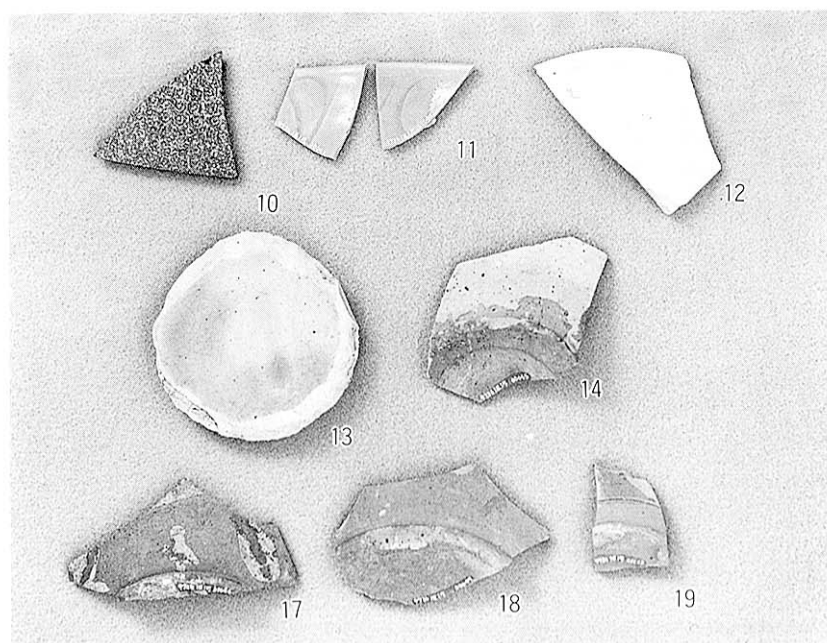
(2) 第3区SX908検出状況（東から）

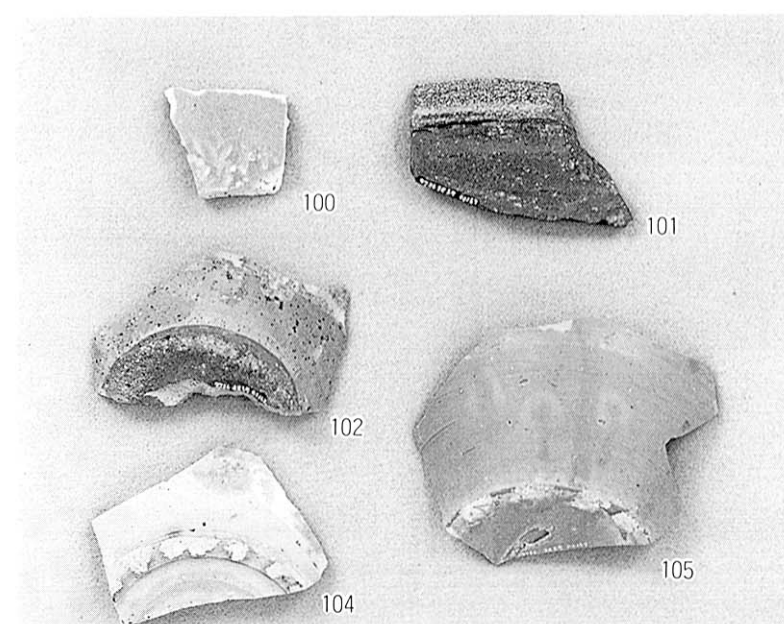
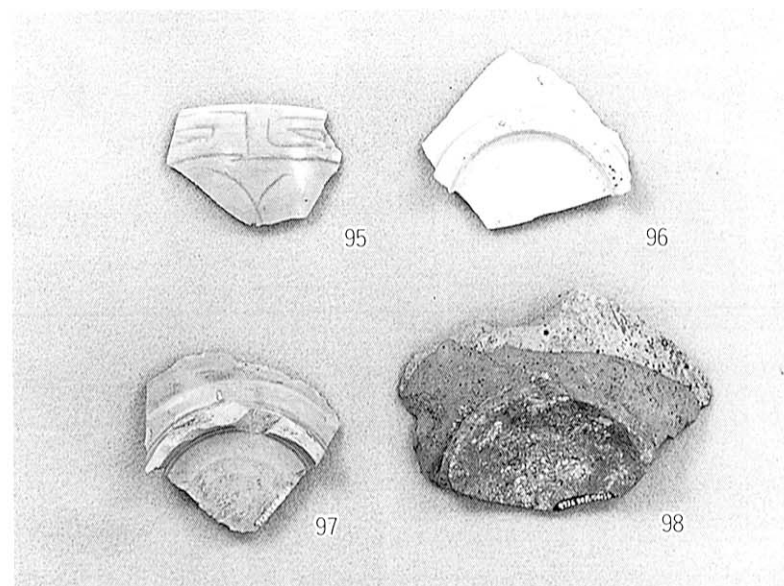
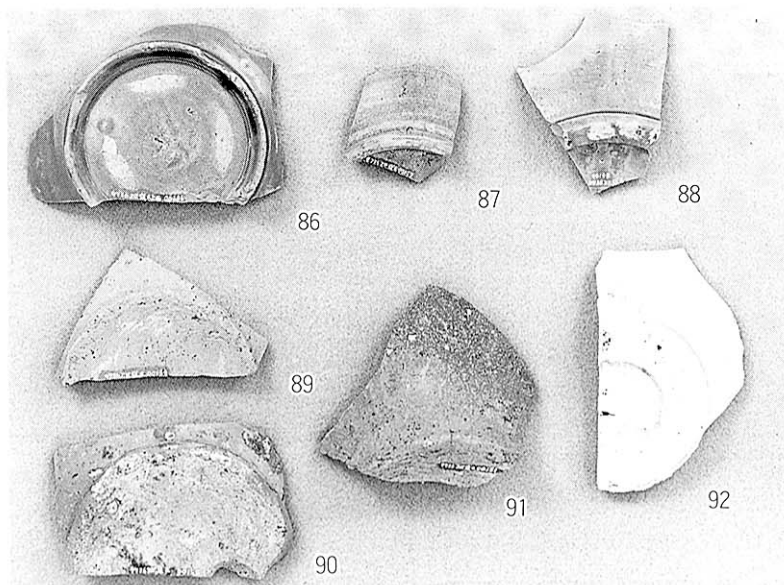


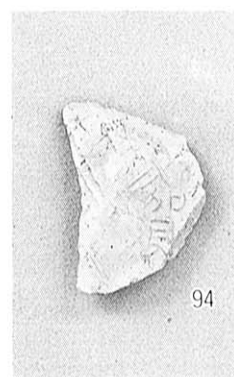
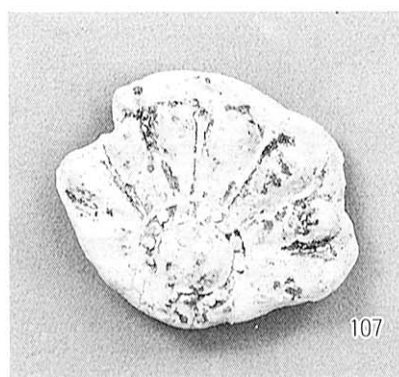
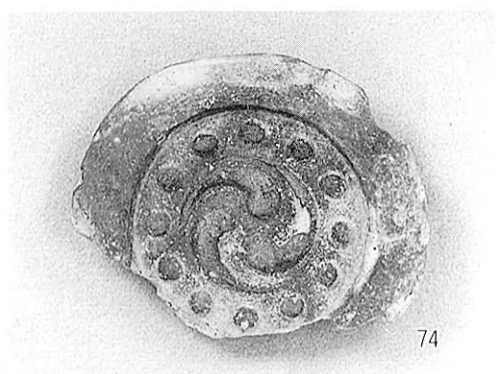
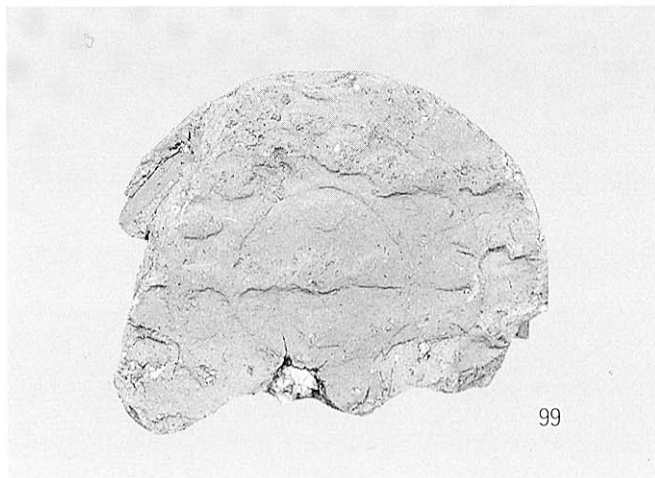
(3) 第3区SX908内作業風景（南から）











第1～3区出土遺物 (1/3)

鴻 臚 館 跡 9

— 平成9年度発掘調査概要報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第586集

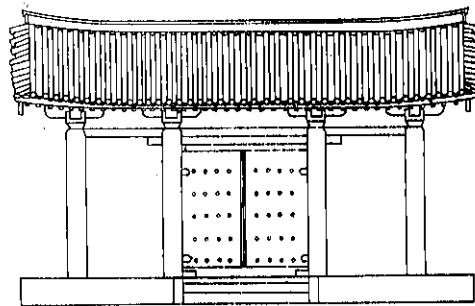
発 行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目8—1
平成10年3月31日

印 刷 大成印刷株式会社
福岡市博多区東那珂三丁目6番62号

KŌROKAN

9

Excavation and Studies of
Kōrokan Ruins
in Fukuoka



March 1998

THE FUKUOKA CITY BOARD OF EDUCATION
JAPAN